

## 令和 6（2024）年度ハタハタ日本海西部系群の資源評価

## 水産研究・教育機構

水産資源研究所 水産資源研究センター（白川北斗、吉川 茜、佐久間啓、  
内藤大河、飯田真也）

水産技術研究所 養殖部門（山本岳男）

参画機関：石川県水産総合センター、福井県水産試験場、京都府農林水産技術センター海  
洋センター、兵庫県立農林水産技術総合センター但馬水産技術センター、鳥取  
県水産試験場、島根県水産技術センター

## 要 約

本系群の資源状態について、漁業依存情報および 2004～2024 年の日本海ズワイガニ等底魚資源調査に基づく面積密度法による資源量推定の結果により評価した。漁獲量は、1970年代から 1980 年代半ばには 8,000 トンを超える年もあったが、1990 年代は 5,000 トンを下回る年が多くなった。1990 年代後半から増加し、2003 年に 1971 年以降で過去最高（9,475 トン）となった。2009 年からは 3,500～6,000 トンで推移した。2022 年は 2,453 トンであったが、翌年の 2023 年は過去最低の 250 トンであった。沖底（1 そうびき）の資源密度指数は中長期的には漁獲量と同様に推移していた。2010 年以降は漁獲量と異なり、数年での変動を伴いながら上昇傾向を示していたが、2023 年の資源密度指数は 1972 以降最低の 2.5 となった。資源密度指数の直近 3 年（2021～2023 年）の平均は 30.6 となり、水準は中位と判断した。また、資源量の直近 5 年間（2020～2024 年）の推移から動向は減少と判断した。2024 年の資源量は 1.7 万トンであった。漁獲圧が現状よりも高まらないよう十分に配慮しながら資源量を維持することを管理目標として、算定規則 1-3) - (3) に基づき、2025 年 ABC を算定した。なお、本報告書における ABC は漁業法改正前の考え方に基づく基本規則 1-3) を適用した値である。

管理基準	Target / Limit	2025 年 ABC (百トン)	漁獲 割合 (%)	F 値 (現状の F 値から の増減%)
0.8F <sub>current</sub>	Target	5.4	5.2	0.04 (-40%)
	Limit	6.7	6.4	0.05 (-20%)

Limit は、管理基準の下で許容される最大レベルの F 値による漁獲量である。Flimit = 基準値 ×  $\beta_2$  とし、 $\beta_2$  は 0.8 とした。Target は、資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、管理基準の下でより安定的な資源の維持が期待される F 値による漁獲量である。Ftarget =  $\alpha$  Flimit とし、係数  $\alpha$  には標準値 0.8 を用いた。漁獲割合は 2025 年の漁獲量を 4 月 1 日時点の資源量で除した値（補足資料 2）。

年	資源量 (百トン)	親魚量 (百トン)	漁獲量 (百トン)	F 値	漁獲割合 (%)
2020	272	70	34	0.15	14
2021	306	143	31	0.12	12
2022	225	118	24	0.13	12
2023	63	4	2	0.04	4
2024	167	83	4	0.03	2
2025	139	77	—	—	—

2024 年の漁獲量は各府県調べによる速報値で、2024 年は 1～5 月の速報値からの予測値であり、2024 年の親魚量、F 値、漁獲割合は予測を含む。また、2025 年の値は将来予測に基づく値。資源量は 1 月 1 日時点の値。F 値は、全年齢群の値であり、漁獲割合から算出した値。漁獲割合は 2025 年の ABC を 4 月 1 日時点の資源量で除した値（補足資料 2）。

水準：中位 動向：減少

本件資源評価に使用したデータセットは以下のとおり

データセット	基礎情報、関係調査等
資源量・年齢別資源尾数	日本海ズワイガニ等底魚資源調査(5～6月、日本海西部海域、水深 190～550 m、水産機構) (以下、トロール調査と呼ぶ)
トロール調査採集効率(q)	q=0.3 を仮定
漁獲量	漁業・養殖業生産統計年報(農林水産省) 月別漁法別水揚げ量の速報値(石川～島根(6)府県) 韓国漁獲統計資料(URL: <a href="http://fs.fips.go.kr/main.jsp">http://fs.fips.go.kr/main.jsp</a> )
体長組成	トロール調査(5～6月、水産機構) 生物情報収集調査(石川～島根(6)府県) 月別体長組成調査(水産機構、石川県、兵庫県、鳥取県)
自然死亡係数(M)	年当たり M=0.5 を仮定
資源密度指数・漁獲努力量	日本海区沖合底びき網漁業漁場別漁獲統計調査資料(水産庁)

## 1. まえがき

日本海西部(島根県～石川県)のハタハタ *Arctoscopus japonicus* は、この海域の底びき網漁業の重要資源であり、我が国周辺における本種の漁獲量の半分近くを占める。本系群は、秋田県と朝鮮東岸で生まれた群で構成されているとされるが、両群の来遊・移出の機構は不明である。

## 2. 生態

### (1) 分布・回遊

本系群は能登半島以西の日本海西部に分布し漁獲対象となるものである(図1)。日本海西部は、秋田県沿岸生まれ群と朝鮮半島東岸生まれ群の双方の成育場であり、両群の出現割合はそれぞれの資源状態によって年変動するとされている(沖山 1970)。ミトコンドリア DNA 調節領域の塩基配列多型により、秋田県沿岸の産卵場に由来する集団が隠岐西方の海域にまで達していることが示唆された(Shirai et al. 2006)。

### (2) 年齢・成長

本系群も本種の日本海北部系群と同様に満1歳の2～3月頃には体長(標準体長)100 mmに達し、2歳で体長150 mm、3歳170 mm、4歳190 mmとなる。いずれの年齢でも雌の方が大きい(池端 1988)(図2)。寿命はおよそ5歳とされる。

なお、ここでいう年齢はふ化(2月頃)からその年の末までを0歳、以降暦年によって1歳、2歳と呼ぶこととした。また、「年級」にはふ化時の年(西暦)を冠することとし、例えば2000年級は2000年にふ化した年級を指す。

### (3) 成熟・産卵

産卵場は、主に朝鮮半島東岸および秋田県や青森県沿岸と推察される。能登半島以西の本州沿岸では、産み付けられた卵やふ化直後の仔魚の報告は若干あるものの、秋田県沿岸のような大規模な産卵場はない。日本海西部では成熟した個体の多くが本海域外に移出すると考えられる。産卵場や産卵期の詳細は不明であるが、移出していく先の海域の一つとされる日本海北部における情報やトロール調査での採集物の成熟状況等を参考に、年齢と成熟率の関係を図3に示した。雄は1歳時の夏季からその半数が成熟を始め、この年の年末（近年では12月）には再生産に関わる。一方、雌は1歳時ではその多くは成熟せず、主に2歳時の年末から産卵に参加すると推察される（藤原 未発表）。

### (4) 被捕食関係

ハタハタ成魚の主餌料はニホンウミノミ（*Themisto japonica*：端脚類）で、その他オキアミ類、橈脚類、イカ類、魚類が多い。沖合ではニホンウミノミの割合が高くなる（秋田県水産振興センターほか 1989）。本種はマダラやアカガレイに捕食されている（藤原 未発表）。

## 3. 漁業の状況

### (1) 漁業の概要

日本海西部では、ほぼ全てが底びき網で漁獲されている。兵庫県と鳥取県は全て沖合底びき網（1そうびき）（以下、沖底（1そうびき）という）であり、石川県、福井県、京都府および島根県では小型底びき網が多い。主漁期は3～5月であり、休漁期明けの9～10月は漁獲されるものの春より少なく、11月～翌年1月はほぼ漁獲されていない。なお、底びき網漁業の本州沿岸域における休漁期は、福井県～島根県では6～8月、石川県では7～8月である。本州沿岸域の夏期の休漁中にも、日本海中央部の大和堆では操業でき、ホッコクアカエビなどととも漁獲されたハタハタが石川県や兵庫県などに水揚げされている。

### (2) 漁獲量の推移

本系群の漁獲量は、1970年代から1980年代半ばには8,000トンを超える年もあったが、1980年代後半に減少し、1990年代は5,000トンを下回る年が多くなった。1990年代後半からは増加し、2003年に過去最高（9,475トン）となった後、1～2年ごとに増減を繰り返した。2009年からは2,900～6,000トンで推移しており、2022年は2,453トンであった。しかし2023年は過去最低の250トンであった（図4、5、表1）。府県別では、2002年までは、兵庫・鳥取両県だけで日本海西部の7～9割を占めていた。2003～2012年は石川県の割合の上昇に伴い、兵庫・鳥取両県の割合は低下していた。2013年以降は石川県の割合が低下し、再び兵庫・鳥取両県で7割以上を占めている。（図6、表1）。なお、2023年の韓国の漁獲量は609トンと日本海西部と同様に前年から急減した（表1）。また漁獲量予測値では2024年は366トンと2023年と比較して増加したものの、依然として少ないことが示されている（表2-2）。

### (3) 漁獲努力量

日本海西部における沖底（1 そうびき）のハタハタの有効漁獲努力量（補足資料 6）を、図 7 および表 1 に示す。1980 年代後半が最高で、その後減少し、1990 年代半ばに約 16 万回となった。2000 年代に入っても減少傾向が続き、2021 年の 5.0 万回で過去最低であったが、2023 年はやや増加し 8.0 万回であった。

## 4. 資源の状態

### (1) 資源評価の方法

日本海西部における沖底（1 そうびき）の資源密度指数（補足資料 6）の 1972～2023 年の推移から資源水準を判断した。動向については、最新の 2024 年のデータが取得されているトロール調査（補足資料 3、4 および 5）に基づき面積密度法により推定した資源量により判断した。資源量の推定方法は補足資料 1 および補足資料 2 に、その計算結果を表 2-1 と 2-2 および表 3 に示した。なお、調査結果に基づき推定した資源量から、2004 年以降の漁獲割合と F 値などを把握した。

### (2) 資源量指標値の推移

沖底（1 そうびき）の資源密度指数（kg/網）を図 8 および表 1 に示す。1970 年代前半は 50 前後で非常に高かったが、1970 年代後半に低下して 1993 年に 13 となった。1998 年以降は増加傾向に転じ、2003 年に急増して 52 となり、2010 年まで 20～50 前後で大きく増減した。2011 年に 16 まで減少したが、その後は再び 20～50 前後で増減している。2017 年は 40 を超えていたが、2018 年は減少して 30 を下回った。2020 年と 2021 年は再び 40 を超えたが、2022 年はやや減少し 32 を示した。しかしながら 2023 年は過去最低の 2.5 を示した。

### (3) 漁獲物の体長組成

鳥取県の漁獲物の体長組成（2013～2023 年）を図 9 に示す。同県によるハタハタの漁獲は全て沖底（1 そうびき）によるもので、浜田沖、隠岐周辺、隠岐北方および但馬沖における漁獲である。近年、鳥取県では、上半期（1～5 月）の漁獲が多く、下半期（9～12 月）は少ない。

日本海西部では水揚げサイズ制限はなく、1 歳魚は、春に来遊していれば 3 月から漁獲加入して下半期から本格的に漁獲されるものの、2011 年以降、1 歳魚（体長 100～120 mm）の漁獲は少ない。2010 年以降で漁獲量が多かった 2015 年には 2 歳魚（豊度がやや高かった 2013 年級）が主体として漁獲され、2016 年の上半期や下半期に漁獲された 180～200 mm の個体も 2013 年級（3 歳魚）と考えられる。このように、豊度が高い年級が 2 歳魚として漁獲された翌年には 3 歳魚が漁獲される傾向にある。2022 年の上半期は例年通り 150 mm 前後の 2 歳魚主体であったが、2022 年の下半期は漁獲が少なかった。それ以上に 2023 年の上半期は漁獲が少なかったが、下半期は少ないながらも 130 mm 前後の 2 歳魚が漁獲された。

#### (4) トロール調査に基づく年齢組成

2013～2024年のトロール調査結果に基づくハタハタの日本海西部における体長組成を図10に示す。この体長組成に複合正規分布をあてはめて年齢分解し、調査時点(6月1日)の各年級群各年齢時の現存尾数を求め、図11に示す。2015年調査時点2歳の2013年級群は、2016年(3歳)も多く、2017年(4歳)でも認められたことから、豊度が高い年級であったと考えられる。また、2020年級は1歳時点では少なかったが、2歳時点では多く、2021年級は、1歳時点では極めて少なく、2002年級以降で過去最低であった。しかしながら2022年級は1歳、2歳ともに増加した(図11)。

#### (5) 資源量と漁獲割合の推移

2004～2024年の年齢別資源尾数(1月1日時点)と、資源量(1月1日時点)および漁獲割合の推移を、図12、13および表2-1、3に示す。資源尾数では、基本的には1歳魚が最も多いが、豊度の高い年級が2歳になる年は2歳魚主体の年齢組成となる。2004年以降の資源量は0.9万トン～5.7万トンで大きく変動している。2018年以降は1.4万トンから3.1万トンで推移し、2022年は2.2万トンであったが1歳魚がほとんど確認できなかった。2023年の資源量は0.6万トンであり、ほぼ1歳魚のみが出現した。2024年では2歳魚が資源の主体となり、16,687トンであった。

本報告では、2023年までの漁獲量および2024年の漁獲量の予測値(補足図2-1)と資源量推定値を用いて漁獲割合を重量ベースで求め、2004～2024年の全年齢群のF値(年齢別選択率は全て1を仮定)を計算した(補足資料2)。漁獲割合(図13、表3)は、2015年までは大きく変動を伴いつつも低下傾向を示し、2015年は10%となった。2016年に20%に上昇したが再び徐々に低下し、2024年は2%と予測された。全年齢群のF値(図14、表3)も2015年までは低下傾向にあった。その後は、上昇して2019年は0.28となったが、2020年以降に低下し、2024年は0.03と予測された。親魚量と加入量(1歳魚)を図15および表3に示す。親魚量は0.1万トンから2.7万トンで推移し、2024年は過去最低であった2023年よりも増加して8,258トンであった。一方加入量は8百万尾～8億尾の間で大きく変動し、2024年は12百万尾であった。

#### (6) 資源の水準・動向

資源水準の判断には沖底(1そうびき)の資源密度指数(kg/網)を用いた。ただし、水準判断には、本種特有の数年ごとの半減・倍増の影響を取り除く目的で、3年の平均値を用いることとした。3年の平均値とは、当年とその前年および前々年の平均である。水準区分の基準値として、資源密度指数の3年平均の最高値(50.6)を3等分し、33.7を高位と中位の境、16.9を中位と低位の境とした(図8)。2023年の資源密度指数は2.5と過去最低値を記録した。水準判断の指標である3年平均の資源密度指数は増減しており、2021～2023年の資源密度指数の平均は30.6であり、水準は中位と判断した。

動向は、2024年のデータもあるトロール調査に基づく資源量の直近5年間(2020～2024年)の推移より判断した(図13)。2020年以降の資源量は変動を伴いながら3万トン前後で推移していたが、2023年は0.6万トンであった。2024年は1.7万トンと増加したが5年間で見ると減少の傾向にあるため、動向は減少と判断した。

## (7) 今後の加入量の見積もり

前年親魚量と翌年加入量（1歳魚）の関係を図16に、再生産成功率（RPS）の経年推移を図17および表3に示す。本報告では、t年のRPSは、(t+1)年の加入尾数（1歳）を(t-1)年の親魚量で除した値である。RPSは、2010年以降高く、2013年に過去最高となったが2014年に低下した。2014～2018年は低く推移した。2019年は再び大きく上昇し（94.8尾/kg）したものの、2020年は大きく低下し、2021年は過去最低の1.1（尾/kg）であったが、2023年はやや増加して7.0（尾/kg）であった。2005～2023年の中央値は28.8（尾/kg）であった。

## (8) 資源と漁獲の関係

トロール調査に基づき年齢別体重を1歳で33g、2歳で56g、3歳で75g、4歳で88g（藤原 未発表）として、現状の漁獲圧に対するYPRと%SPRの関係を示す（図18）。その際、漁獲開始年齢は1歳、成熟率は1歳で0、2歳以上で1とした。また、年齢別選択率は全て1とした。

現状のF（F<sub>current</sub>）を2022～2024年の平均のFとした。F<sub>current</sub>（=0.07）は、F<sub>30%SPR</sub>やF<sub>0.1</sub>を大きく下回っており、F<sub>med</sub>（=0.13）よりも低かった。

## 5. 2025年ABCの算定

## (1) 資源評価のまとめ

本系群の漁獲量は、1970年代から1980年代半ばには8,000トンを超える年もあったが、1980年代後半に減少し、1990年代は5,000トンを下回る年が多くなった。2000年以降は増加し、2003年には1971年以降で過去最高（9,475トン）となった。その後も半減・倍増を繰り返していたが、2009年以降は3,500～6,000トンで推移し、2023年は過去最低の250トンであった（図6）。沖底（1そうびき）の資源密度指数は中長期的には漁獲量と同様に推移していたが、2010年以降は漁獲量と異なり、数年での変動を伴いながら上昇傾向を示している。2023年の資源密度指数は2022年よりも大きく減少したものの、2021～2023年の資源密度指数（kg/網）の平均は30.6であったことから、水準は中位と判断した（図8）。また、直近5年間（2020～2024年）の資源量の推移から、動向は減少と判断した。2024年の資源量は17千トンであった（図13）。

## (2) ABCの算定

現在、得られている再生産成功率のデータは低水準期の情報が含まれず、また本種の回遊生態に起因する高い不確実性を伴うため、再生産関係に基づくB<sub>limit</sub>の設定はしないこととした。そして、水準は中位で動向は減少であることから、ABC算定の基本規則の1-3)

- (3) に基づき、

$$F_{limit} = \text{基準値} \times \beta_2$$

$$F_{target} = F_{limit} \times \alpha$$

によって、現状の漁獲圧により、資源量を維持することを管理目標として、2025年ABCを算定した。基準値はF<sub>current</sub>とした。F<sub>limit</sub>（F<sub>current</sub>）による2025年の漁獲量を補足資料

2に基づき 8.4 百トンと推定した。ABC<sub>limit</sub> = 6.7 百トン、ABC<sub>target</sub> = 5.4 百トンと算定した。なお、本報告書における ABC は漁業法改正前の考え方に基づく基本規則 1-3) (水産庁・水産機構 2024) を適用した値である。

管理基準	Target/ Limit	2025 年 ABC (百トン)	漁獲割合 (%)	F 値 (現状の F 値からの増減%)
0.8F <sub>current</sub>	Target	5.4	5.2	0.04 (-40%)
	Limit	6.7	6.4	0.05 (-20%)

Limit は、管理基準の下で許容される最大レベルの F 値による漁獲量である。F<sub>limit</sub> = 基準値 × β<sub>2</sub> とし、β<sub>2</sub> は 1 未満の係数として定義され、本系群では 5 (3) の結果も勘案し 0.8 とした。Target は、資源変動の可能性やデータ誤差に起因する評価の不確実性を考慮し、管理基準の下でより安定的な資源の維持が期待される F 値の漁獲量である。F<sub>target</sub> = α F<sub>limit</sub> とし、安全率 α には標準値 0.8 を用いた。漁獲割合は 2025 年の漁獲量を 4 月 1 日時点の資源量で除した値 (補足資料 2)。



## (3) ABC の評価

各管理基準に基づく漁獲量、資源量および親魚量の変化を下表および図 19～21 に示した。現状の漁獲 ( $0.8F_{\text{current}}=0.05$  および  $F_{\text{current}}$ ) であれば資源量は維持される。2024 年は、1 歳魚は近年では少ないながらも過去最低水準であった 2022 年を大きく上回り、漁獲を支える 2 歳魚は前年より多く出現しており、近年の漁獲量減少に回復の兆しが見られる。なお、2024 年以降の将来予測では、2005 年以降の中央値  $RPS_{\text{med}}$  を用いて加入量を予測した。

管理基準	F 値	漁獲量(百トン)							
		2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030
$F_{\text{current}}$	0.07	3	4	8	10	10	11	11	11
$0.8F_{\text{current}}$	0.05	3	4	7	8	8	9	9	10
$F_{\text{med}}$	0.13	3	4	16	18	18	18	18	17
$F_{30\%SPR}$	0.45	3	4	47	46	37	28	22	18
$F_{0.1}$	0.67	3	4	64	57	39	24	17	11
		資源量(百トン)							
		2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030
$F_{\text{current}}$	0.07	63	167	139	165	165	176	187	188
$0.8F_{\text{current}}$	0.05	63	167	139	166	168	181	194	197
$F_{\text{med}}$	0.13	63	167	139	160	154	155	156	151
$F_{30\%SPR}$	0.45	63	167	139	137	109	82	65	52
$F_{0.1}$	0.67	63	167	139	126	86	53	36	25
		親魚量(百トン)							
		2023	2024	2025	2026	2027	2028	2029	2030
$F_{\text{current}}$	0.07	4	83	77	49	52	74	78	67
$0.8F_{\text{current}}$	0.05	4	83	78	51	54	77	82	71
$F_{\text{med}}$	0.13	4	83	72	43	46	61	60	50
$F_{30\%SPR}$	0.45	4	83	53	23	23	23	17	11
$F_{0.1}$	0.67	4	83	42	15	14	12	7	4

$F_{\text{current}}$  は 2022～2024 年の平均、各年齢の F 値は等しいと仮定した。親魚量は漁期後の値である。

## (4) ABC の再評価

昨年度評価以降追加されたデータセット	修正・更新された数値
2022 年漁獲量(農林統計)確定値	2022 年漁獲量の確定
2023 年漁獲量(農林統計)暫定値	2023 年漁獲量(農林統計)の追加
2023 年漁獲量(府県集計) 6～12 月の速報値	2023 年漁獲量(府県集計)6～12 月の追加 2023 年の年齢別漁獲尾数の確定
2024 年漁獲量(府県集計) 1～5 月の速報値	2024 年漁獲量(府県集計)1～5 月の追加 2024 年の年齢別漁獲尾数の更新
2023 年資源尾数確定値	2023 年資源尾数の確定 2023 年の年齢別資源尾数、F 値の確定
2024 年現存尾数	2024 年資源尾数の更新 2024 年の年齢別資源尾数、F 値の更新

評価対象年 (当初・再評価)	管理基準	F 値	資源量 (百トン)	ABClimit (百トン)	ABCtarget (百トン)	漁獲量 (百トン) (実際の F 値)
2023 年(当初)	Fcurrent	0.14	291	36	29	
2023 年(2023 年 再評価)	Fcurrent	0.14	60	1	1	
2023 年(2024 年 再評価)	Fcurrent	0.14	60	1	1	3 (0.25)
2024 年(当初)	Fcurrent	0.09	168	14	11	
2024 年(2024 年 再評価)	Fcurrent	0.03	147	4	3	

2024 年(2024 年再評価)では 2023 年の漁獲量減少に伴い推定値が更新され、ABClimit が下方修正された。なお、2024 年再評価において F 値が大きく低下したのは、2024 年の資源量に対して該当年の漁獲割合が低かったことに起因している。

## 6. その他の管理方策の提言

2008 年は非常に多く水揚げされ、市場での単価の低下、処理能力の限界から、各府県で水揚げ量の制限・網目拡大などの自主的な取り組みが実施された。そして 2009 年以降、単価が極端に安い 1 歳魚が多く混じると水揚げが控えられており、1 歳魚が保護されやすくなっている。1 年保護して 2 歳以上になってから漁獲する方が経済効率は高くなる(志村 2012) ことから、今後も網目拡大の取り組みは続け、経済効率の高い 2 歳魚主体に漁獲することが重要である。また、本系群の産卵場は、主に朝鮮半島東岸および秋田県や青森県沿岸と推察される。2022 年のように 1 歳魚の資源量が極端に少ない年に関しては、ソースとなり得る系群の再生産の状況に注視することが重要となる。なお、2023 年の漁獲量低迷の要因に関しては、補足資料 7 を参照のこと。

## 7. 引用文献

- 秋田県水産振興センター・山形県水産試験場・鳥取県水産試験場・島根県水産試験場 (1989) ハタハタの生態と資源管理に関する研究報告書. 昭和 63 年度水産業地域重要新技術開発促進事業報告書, 118 pp.
- 池端正好 (1988) ハタハタの耳石に関する基礎的研究. 第 2 回ハタハタ研究協議会報告書, 日本海区水産研究所, 40-50.
- 沖山宗雄 (1970) ハタハタの資源生物学的研究 II 系統群 (予報). 日水研報, **22**, 59-69.
- 志村 健 (2012) 鳥取県のハタハタの資源動向、資源管理について. 第 13 回日韓水産セミナー (講演要旨集), 24-27.
- Shirai, S. M., R. Kuranaga, H. Sugiyama and M. Higuchi (2006) Population structure of the sailfin sandfish, *Arctoscopus japonicus* (Trichodontidae), in the Sea of Japan. Ichthyol. Res., **53**, 357-368.
- 水産庁, 水産研究・教育機構 (2024) 令和 6 (2024) 年度 ABC 算定のための基本規則. FRA-SA2024-ABCWG02-02, 水産研究・教育機構, 横浜, 11pp. [https://abchan.fra.go.jp/references\\_list/FRA-SA2024-ABCWG02-02.pdf](https://abchan.fra.go.jp/references_list/FRA-SA2024-ABCWG02-02.pdf) (last accessed 19 August, 2024)



図1. ハタハタ日本海西部系群の分布

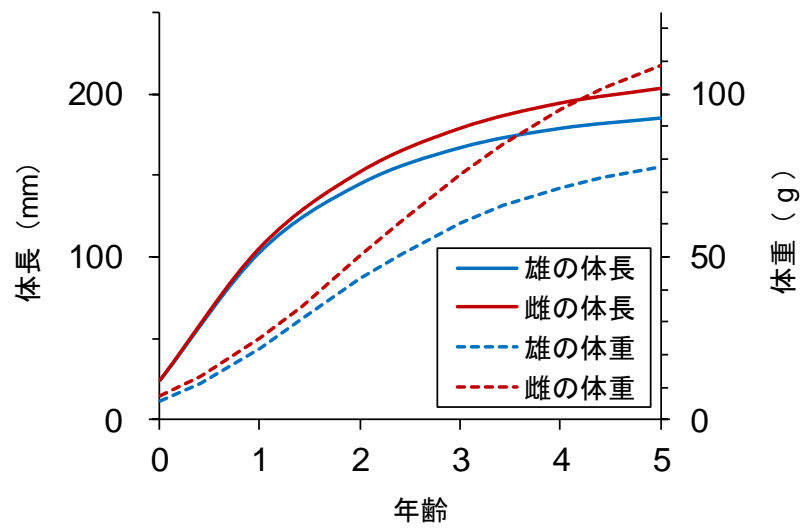


図2. ハタハタの年齢と体長および体重の関係

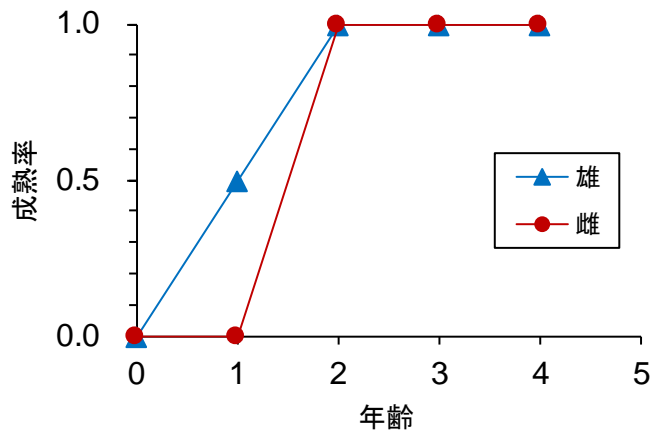


図3. ハタハタの年齢と成熟率の関係

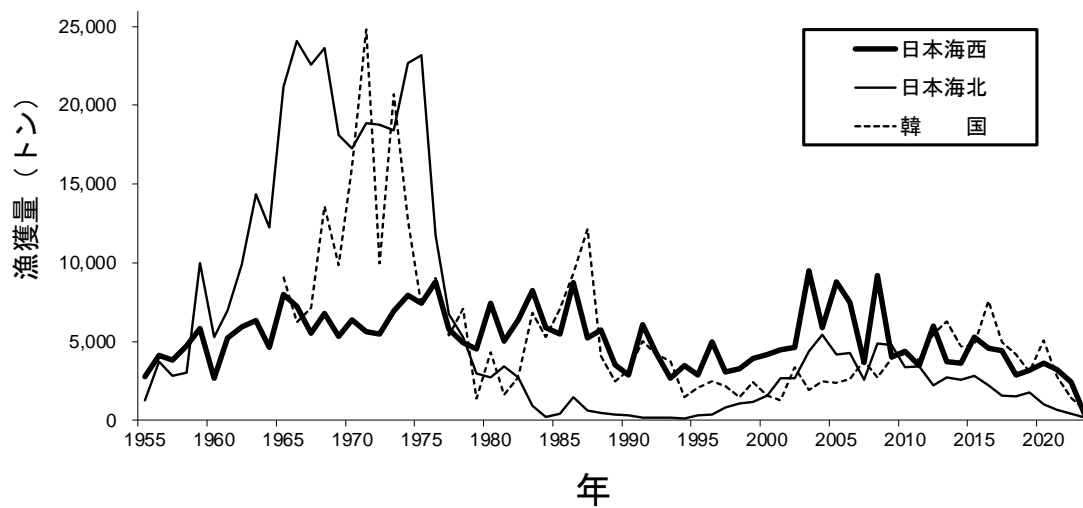


図4. 日本海2海域と韓国におけるハタハタの漁獲量（1955～2023年）

日本海西：島根県～石川県、日本海北：富山県～青森県、韓国：韓国国内全域（主な漁場は朝鮮半島東岸）。

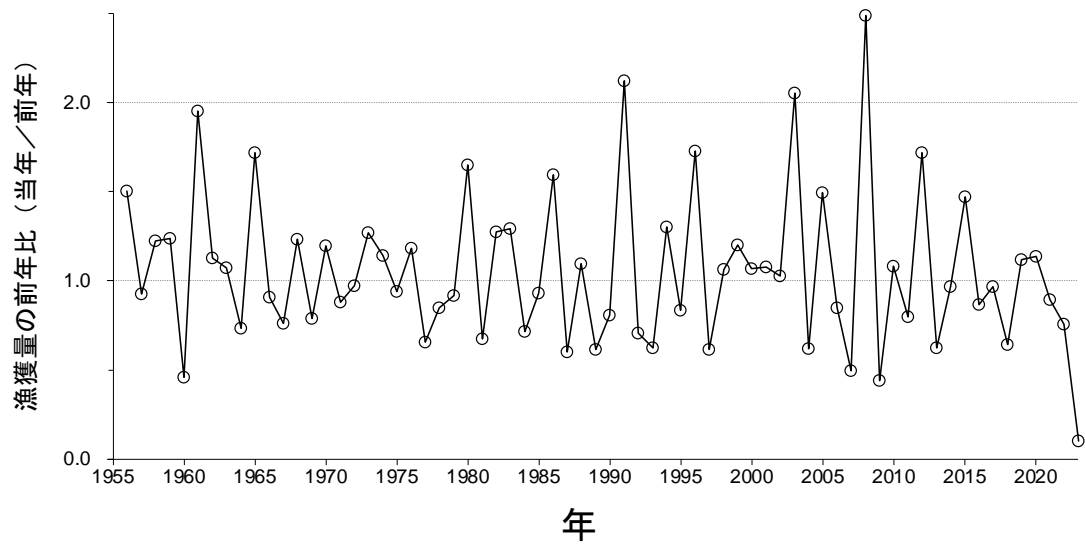


図5. 日本海西部における漁獲量の前年比 (当年/前年)

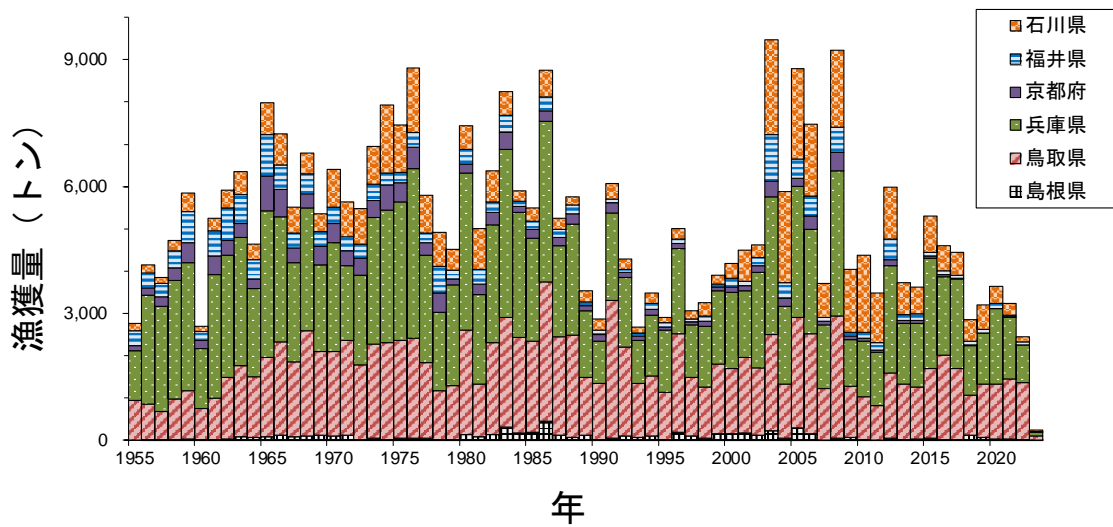


図6. 日本海西部における漁獲量 (1955～2023年)

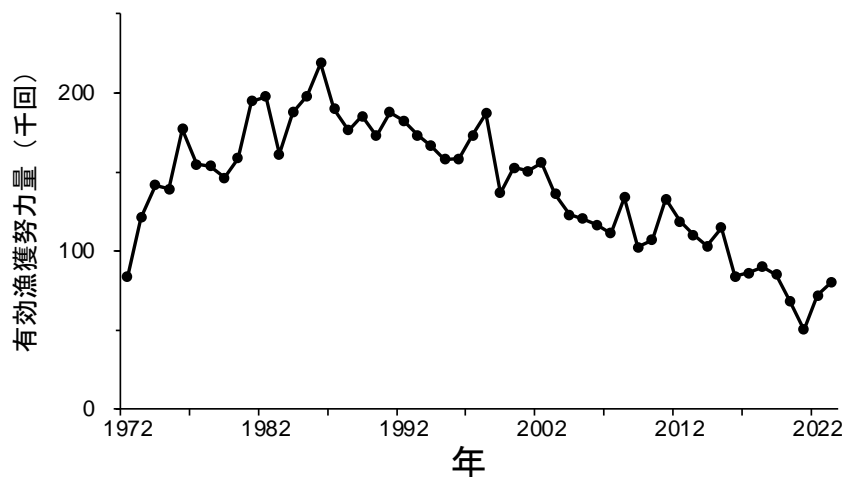


図 7. 日本海西部におけるハタハタの有効漁獲努力量（1972～2023 年）  
 沖底（1 そうびき）の漁獲成績報告書に基づいた。

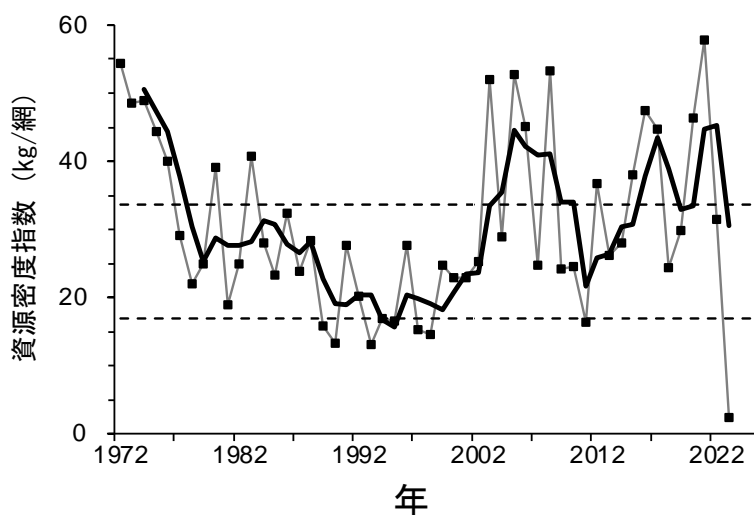


図 8. 日本海西部におけるハタハタの資源密度指数とその平均  
 沖合底びき網（1 そうびき）の漁獲成績報告書に基づいた。  
 — : 資源密度指数、 ——— : 3 年平均、 ---- : 水準の判断の区分。

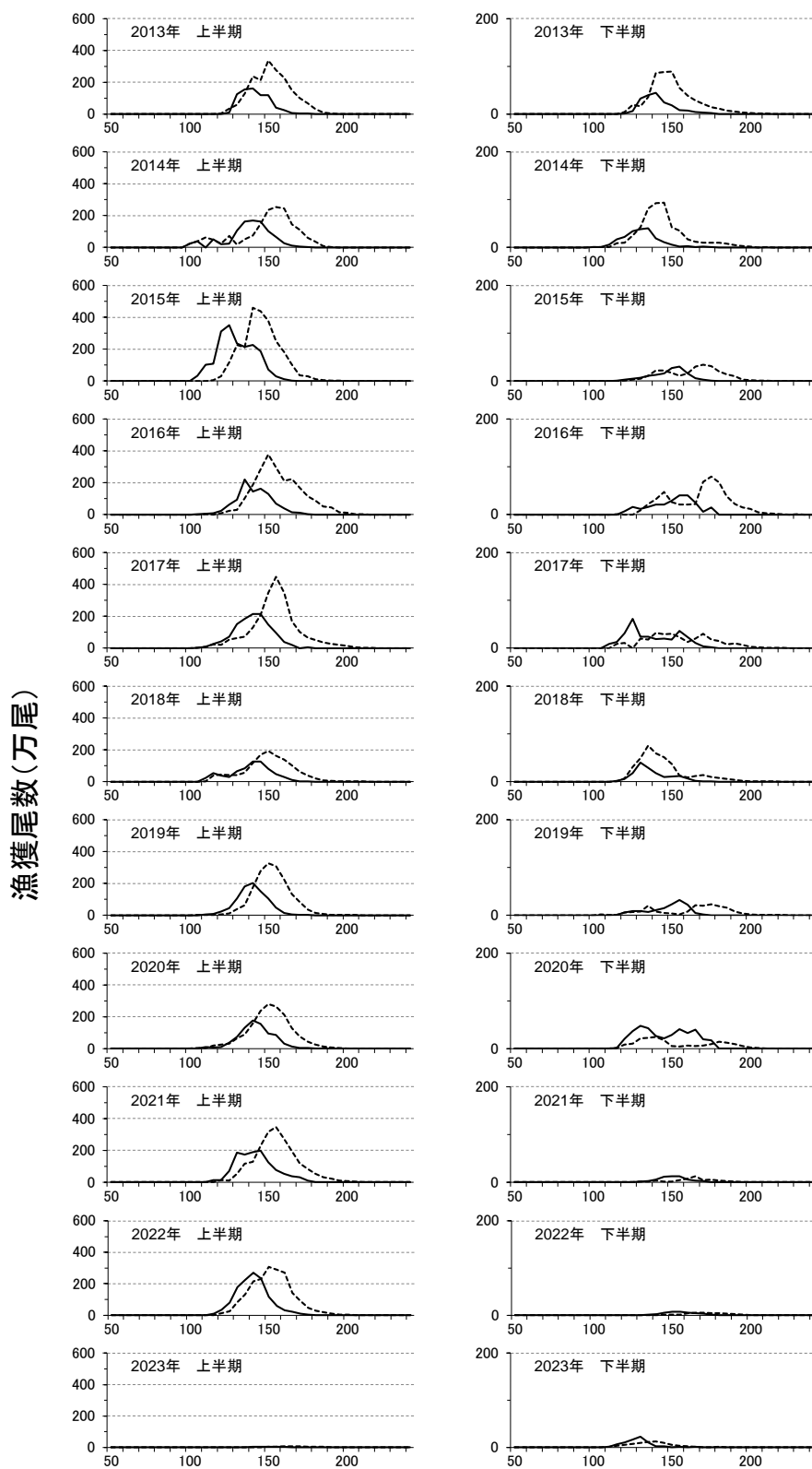


図9. 鳥取県に水揚げされた漁獲物の体長組成 (2013～2023年)

左は上半期 (1～5月)、右は下半期 (9～12月) である。縦軸は漁獲尾数 (万尾) (補助線は200万尾)、横軸は体長 (mm)。— : 雄、--- : 雌。



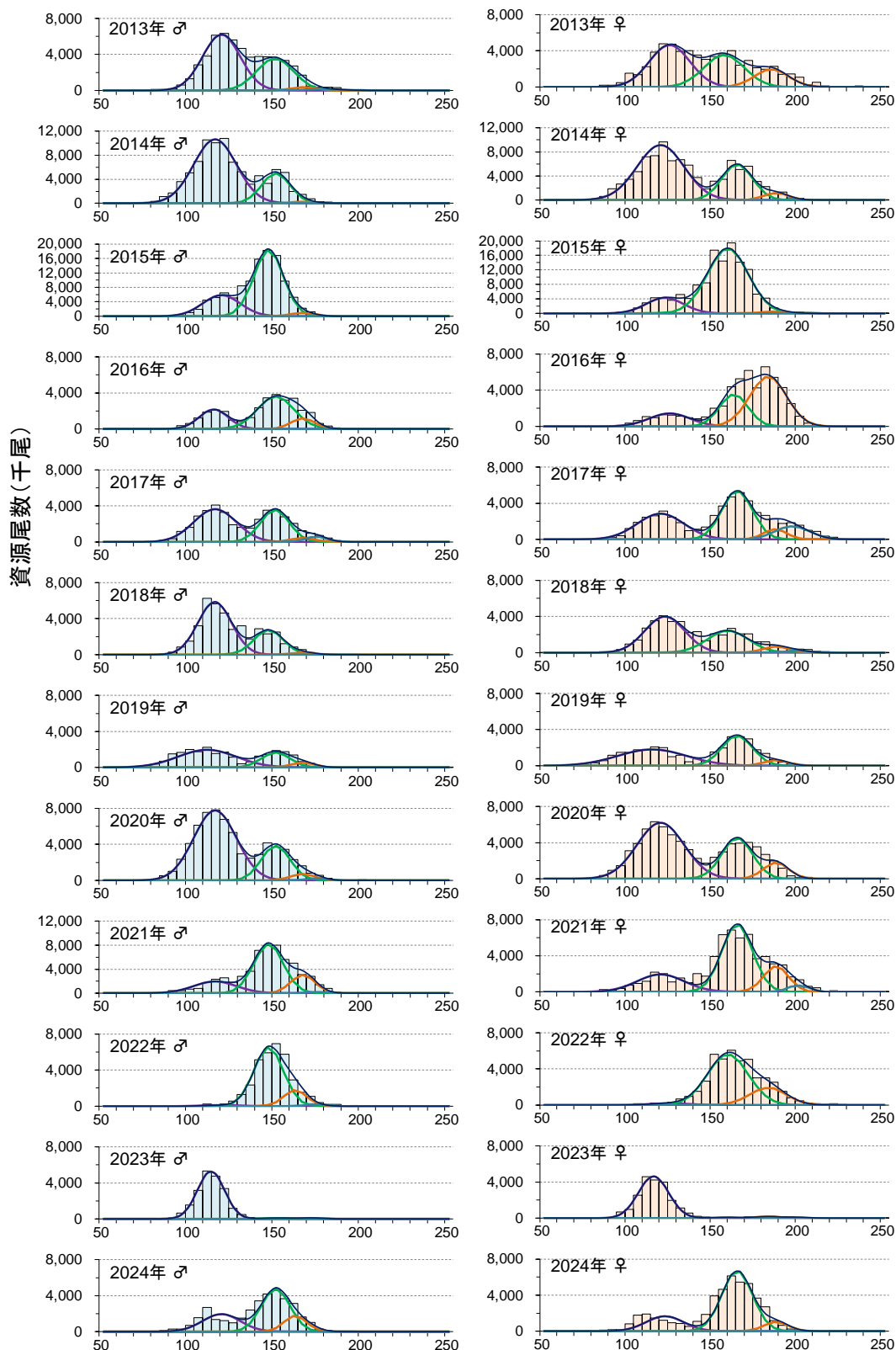


図 10. 2013～2024 年までのズワイガニ等底魚資源調査（但州丸）を基にした日本海西部におけるハタハタの体長組成（左図：雄、右図：雌）  
 紫線：1 歳魚、緑線：2 歳魚、橙線：3 歳魚、青線：4 歳魚、黒線：合計。

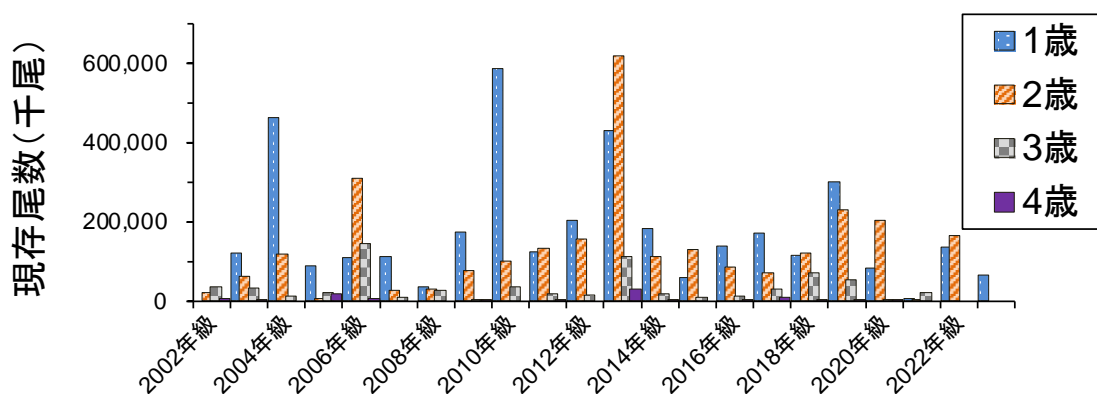


図 11. 日本海西部におけるハタハタの年級群別現存尾数 (調査時点 (6月1日))

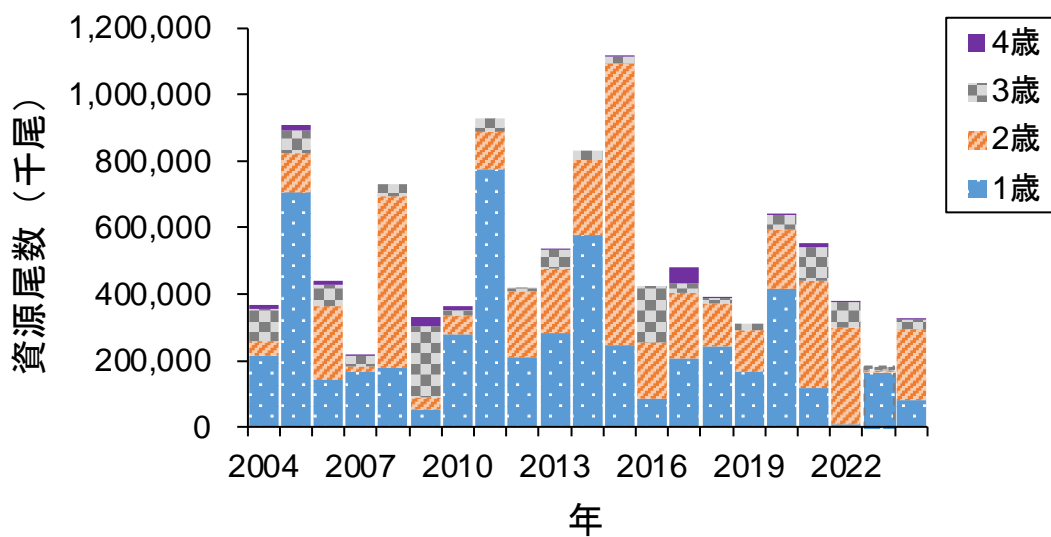


図 12. 年齢別資源尾数 (1月1日時点)

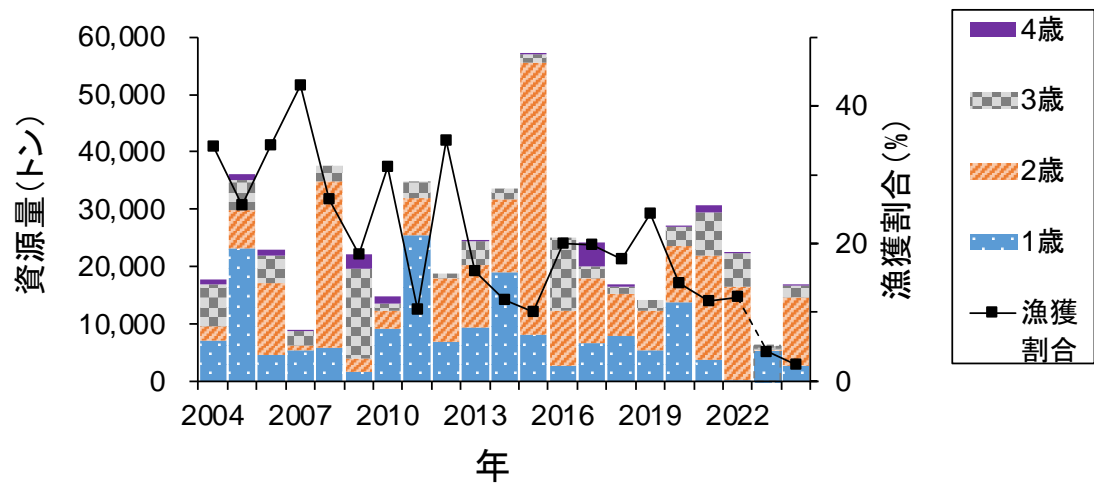


図 13. 資源量（1月1日時点）と漁獲割合の経年推移

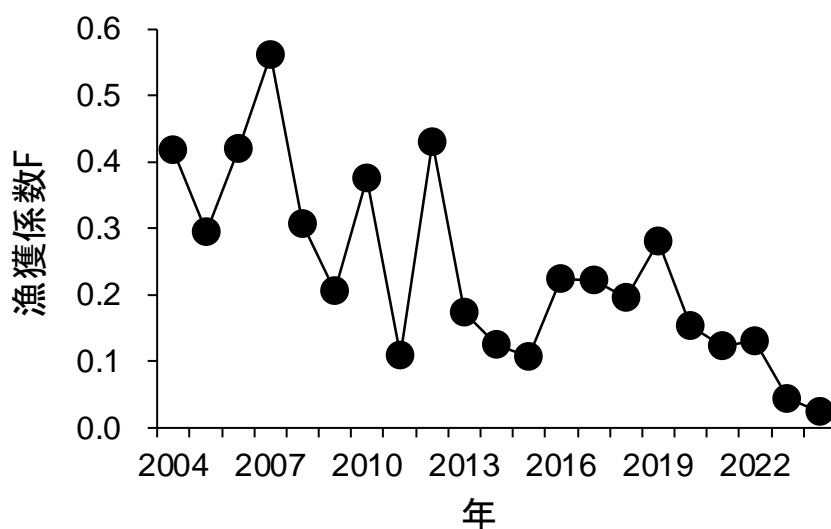


図 14. 漁獲係数 F（全年齢群の F 値）の推移

全年齢群の F 値は、各年齢の F 値は等しいと仮定し、漁獲割合より算出した値（補足資料 2）。

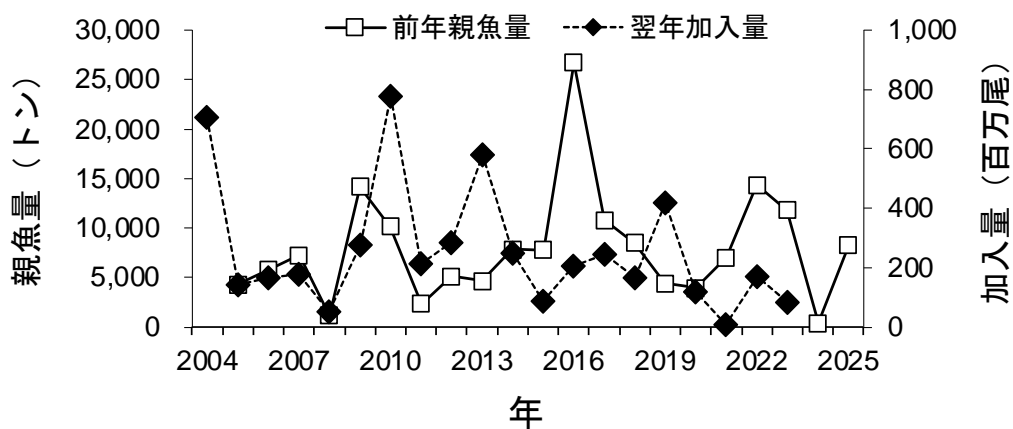


図 15. 前年親魚量と翌年加入量（1 歳魚）の推移

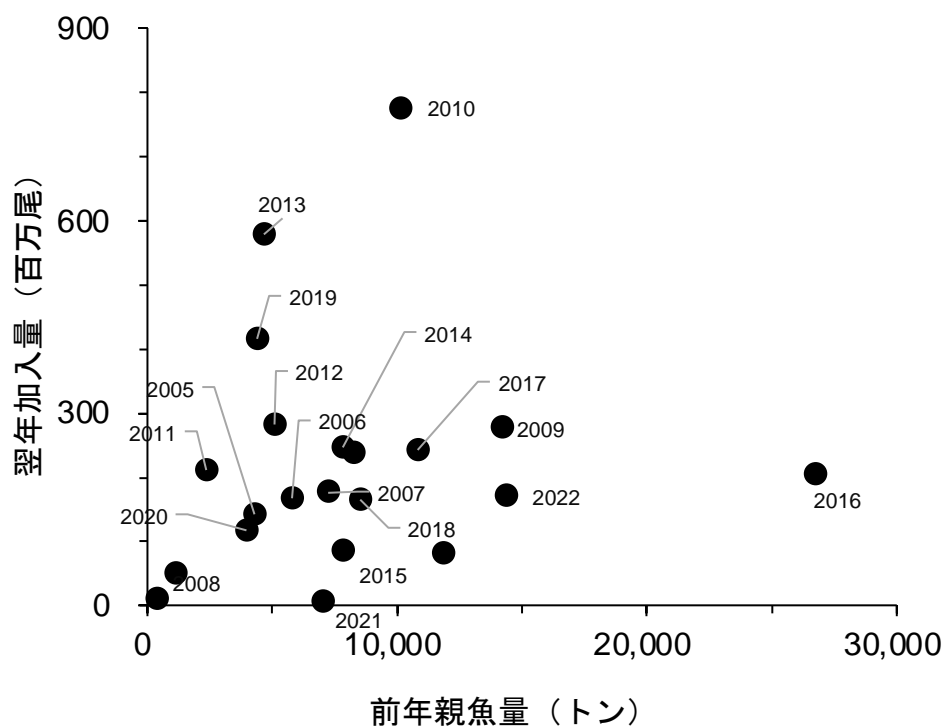


図 16. 前年親魚量と翌年加入量（1 歳魚）の関係

ラベルは加入量とした年級がふ化した年を示す。t 年の再生産成功率（RPS）は t+1 年の加入尾数（1 歳）を t-1 年の産卵親魚量で除した値。

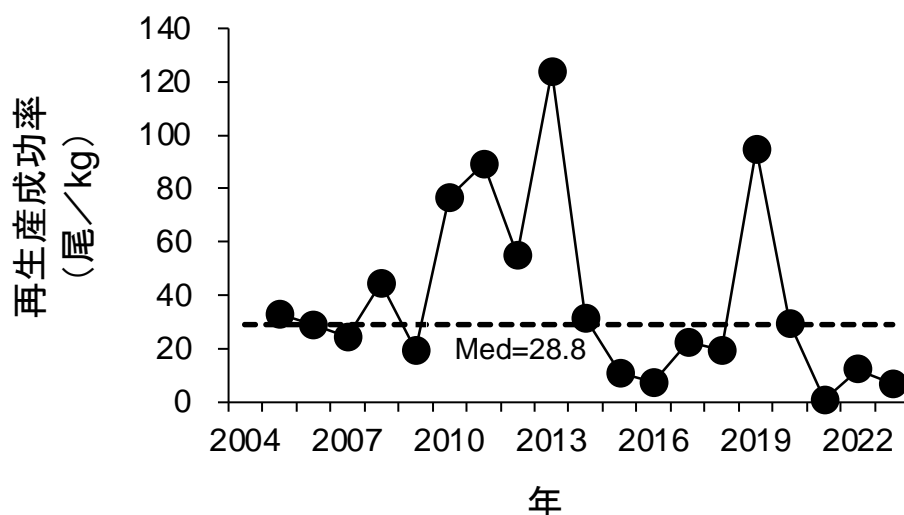


図 17. 再生産成功率の推移

横軸は、再生産成功率の計算において加入量とした年級群がふ化した年を示す。破線は 2005～2023 年の中央値（Med）である。

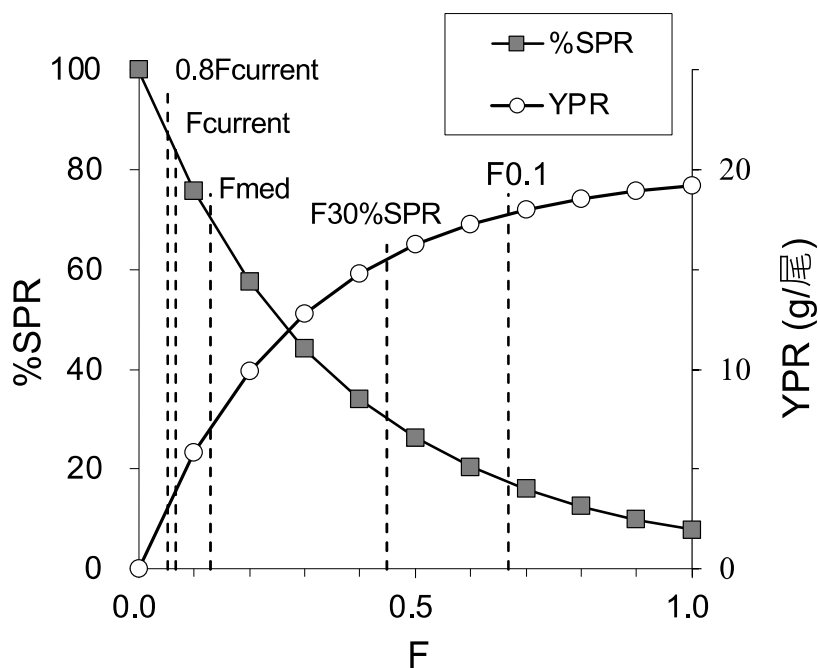


図 18. %SPR、加入量あたり漁獲量（YPR）と漁獲係数 F の関係

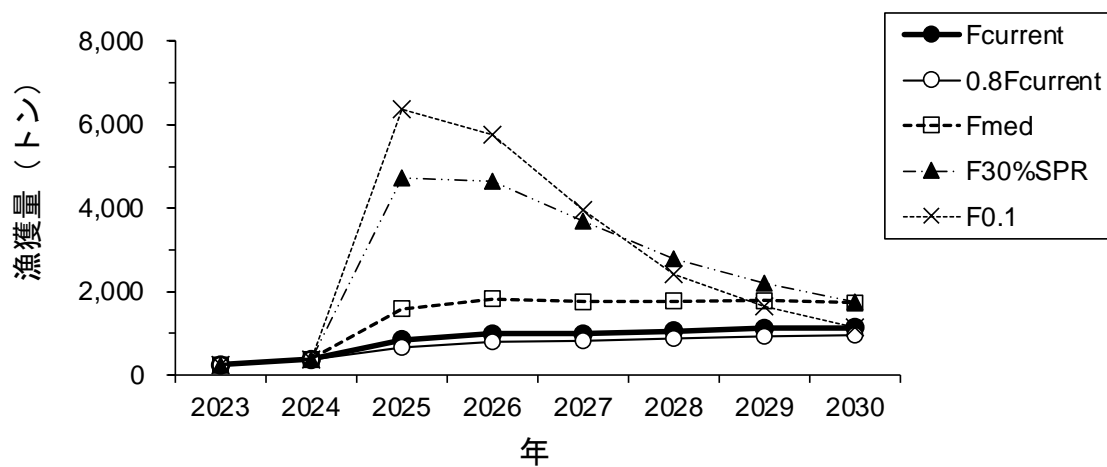


図 19. 様々な管理基準に基づく漁獲量の変化

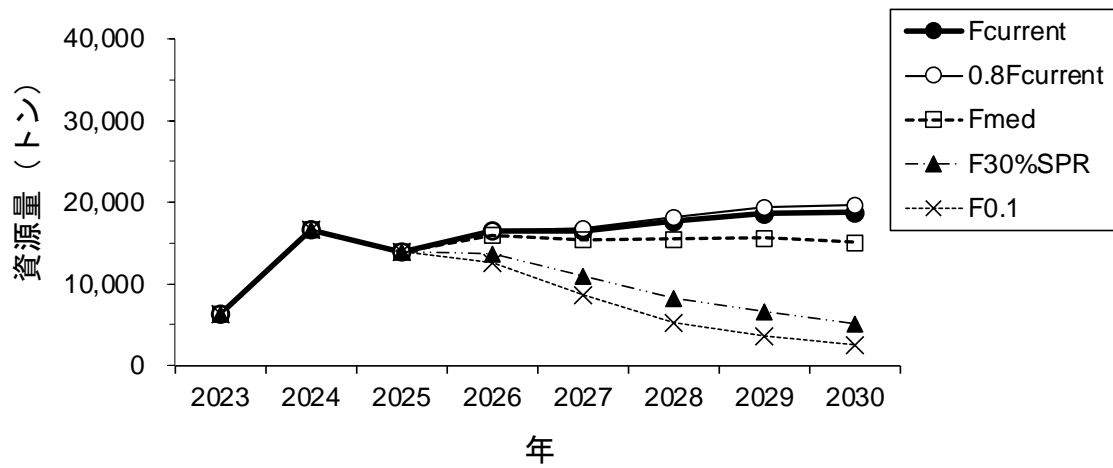


図 20. 様々な管理基準に基づく資源量の変化

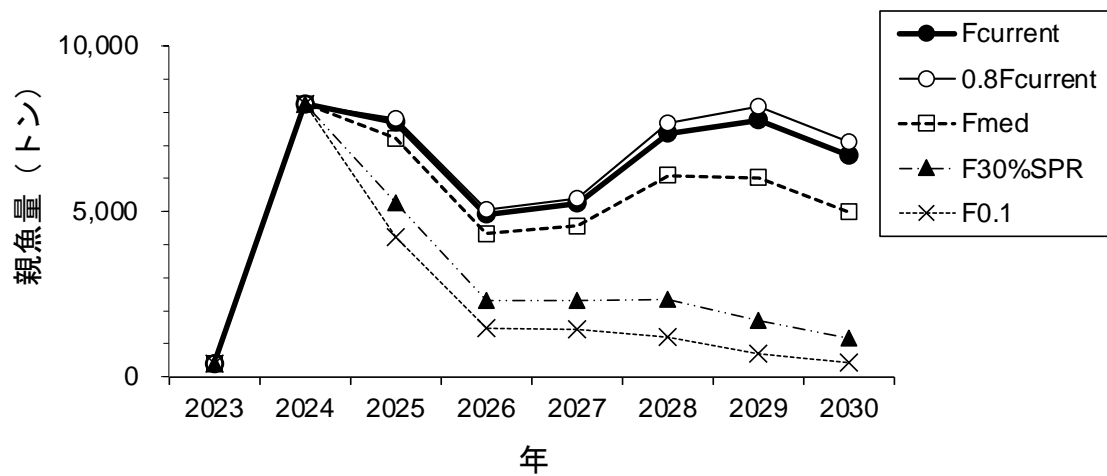


図 21. 様々な管理基準に基づく親魚量の変化

表 1. 日本海西部の各府県の漁獲量（トン）と日本海西区・中区・沖合区における沖合底びき網（1 そうびき）の資源密度指数（kg/網）と有効漁獲努力量（回）並びに韓国の漁獲量（トン）

年	島根	鳥取	兵庫	京都	福井	石川	西部計	密度指数	漁獲努力量	韓国
1971	118	2,246	1,769	351	332	817	5,633			24,809
1972	19	1,767	2,111	399	339	840	5,475	54.3	83,711	9,961
1973	49	2,232	2,979	402	386	892	6,940	48.6	121,070	20,736
1974	17	2,297	3,135	585	282	1,607	7,923	48.9	141,554	12,723
1975	58	2,299	3,281	453	244	1,113	7,448	44.4	139,288	7,267
1976	45	2,366	4,015	510	350	1,522	8,808	40.0	177,217	9,065
1977	42	1,800	2,541	294	222	896	5,795	29.2	154,647	5,363
1978	19	1,146	1,859	464	617	819	4,924	22.0	153,866	7,097
1979	18	1,267	2,393	136	209	488	4,511	25.0	146,347	1,367
1980	130	2,473	3,716	216	339	562	7,436	39.1	158,790	4,348
1981	91	1,241	2,111	254	338	978	5,013	18.9	194,792	1,631
1982	131	2,183	2,787	291	241	743	6,376	24.9	197,591	2,748
1983	314	2,591	3,980	403	397	553	8,238	40.8	161,241	6,834
1984	168	2,270	2,952	138	125	247	5,900	28.0	187,872	5,295
1985	183	2,163	2,426	216	186	322	5,496	23.3	198,082	7,100
1986	446	3,303	3,791	256	326	634	8,756	32.4	218,995	9,346
1987	121	2,322	2,166	184	196	266	5,255	23.8	189,780	12,169
1988	70	2,409	2,638	238	211	187	5,753	28.4	176,495	4,099
1989	119	1,369	1,573	124	92	265	3,542	15.9	185,438	2,470
1990	17	1,335	994	158	98	261	2,863	13.3	172,956	3,163
1991	53	3,248	2,079	246	86	363	6,075	27.7	187,947	5,034
1992	101	2,111	1,643	117	69	247	4,288	20.3	182,483	4,202
1993	73	1,281	1,012	92	84	131	2,673	13.2	173,418	3,781
1994	103	1,424	1,426	151	140	234	3,478	17.0	166,614	1,466
1995	21	1,119	1,469	70	101	116	2,896	16.7	157,994	2,065
1996	190	2,321	2,025	127	100	237	5,000	27.7	158,334	2,501
1997	95	1,385	1,246	65	70	207	3,068	15.3	173,310	2,194
1998	42	1,209	1,449	110	135	316	3,261	14.6	187,057	1,490
1999	161	1,643	1,723	93	66	223	3,909	24.8	136,808	2,449
2000	160	1,532	1,805	121	207	354	4,179	22.9	152,846	1,571
2001	181	1,778	1,580	115	114	723	4,491	22.9	150,614	1,286
2002	124	1,593	2,255	151	197	298	4,618	25.4	155,890	3,382
2003	217	2,292	3,253	360	1,105	2,248	9,475	51.9	136,085	1,928
2004	52	1,268	1,846	198	367	2,142	5,873	28.9	122,944	2,472
2005	295	2,612	3,090	203	458	2,124	8,782	52.7	120,371	2,401
2006	152	2,361	2,483	299	476	1,695	7,466	45.2	116,527	2,647
2007	6	1,219	1,512	84	86	799	3,706	24.8	111,073	3,769
2008	52	2,881	3,437	443	593	1,811	9,217	53.2	133,950	2,720
2009	66	1,201	1,113	86	84	1,496	4,046	24.2	102,487	3,939
2010	10	1,023	1,307	76	142	1,814	4,372	24.5	107,083	4,236
2011	3	819	1,256	61	177	1,168	3,484	16.4	132,669	3,834
2012	43	1,555	2,535	140	489	1,218	5,980	36.8	118,642	5,494
2013	17	1,316	1,430	63	141	768	3,735	26.2	110,105	6,305
2014	39	1,225	1,508	64	155	623	3,614	28.1	103,127	4,684
2015	54	1,647	2,608	50	87	861	5,307	38.0	114,771	4,762
2016	14	1,995	1,864	41	86	601	4,601	47.4	83,913	7,592
2017	18	1,682	2,107	30	71	538	4,446	44.7	86,171	4,965
2018	117	941	1,181	15	85	520	2,860	24.4	89,991	4,208
2019	71	1,259	1,206	8	85	565	3,194	29.8	85,159	3,058
2020	29	1,294	1,783	9	128	392	3,635	46.3	68,346	5,110
2021	40	1,413	1,456	4	51	281	3,245	57.9	50,318	2,760
2022	23	1,334	891	11	72	122	2,453	31.5	71,951	1,408
2023	0	104	90	0	8	48	250	2.5	80,315	609

\* 各府県の漁獲量は漁業・養殖業生産統計年報による。 韓国の値は韓国統計庁 漁業生産統計による。



表 2-1. トロール調査に基づく各時点における資源尾数と資源量

## 調査時点(6月1日)の現存尾数(千尾)

	年齢	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
現存尾数 (千尾)	1歳	122,529	465,183	88,216	110,014	113,905	37,139	173,813	588,859	125,475	204,885
	2歳	22,692	62,439	118,341	6,259	310,210	26,767	29,432	79,218	101,980	132,900
	3歳	49,396	37,641	34,684	13,410	22,114	145,343	9,003	28,377	5,418	36,851
	4歳	5,101	6,506	6,253	843	0	19,796	7,873	0	0	2,837
	計	199,718	571,770	247,494	130,527	446,229	229,045	220,121	696,454	232,873	377,473

## 調査時点(6月1日)の現存量(トン)

	年齢	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
現存量* (トン)	1歳	4,027	15,288	2,899	3,616	3,743	1,221	5,712	19,352	4,124	6,733
	2歳	1,271	3,497	6,628	351	17,375	1,499	1,649	4,437	5,712	7,444
	3歳	3,701	2,820	2,599	1,005	1,657	10,890	675	2,126	406	2,761
	4歳	449	572	550	74	0	1,741	692	0	0	249
	計	9,447	22,178	12,676	5,045	22,775	15,350	8,728	25,916	10,242	17,188

## 1月1日時点の資源尾数(千尾)

	年齢	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
資源尾数 (千尾)	1歳	213,318	707,888	142,522	167,158	177,585	51,568	278,151	776,260	212,297	282,558
	2歳	45,176	116,359	220,246	14,661	518,431	38,881	55,515	113,496	197,376	195,819
	3歳	98,340	70,145	64,551	31,410	36,958	211,123	16,981	40,656	10,486	54,298
	4歳	10,155	12,125	11,638	1,976	0	28,756	14,851	0	0	4,180
	計	366,989	906,516	438,958	215,205	732,974	330,328	365,499	930,412	420,158	536,855

## 資源量(1月1日時点)

	年齢	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
資源量* (トン)	1歳	7,011	23,264	4,684	5,494	5,836	1,695	9,141	25,511	6,977	9,286
	2歳	2,530	6,517	12,336	821	29,038	2,178	3,109	6,357	11,055	10,968
	3歳	7,368	5,255	4,836	2,353	2,769	15,818	1,272	3,046	786	4,068
	4歳	893	1,066	1,023	174	0	2,529	1,306	0	0	368
	計	17,802	36,103	22,880	8,842	37,643	22,219	14,829	34,914	18,818	24,690

## 4月1日\*\*時点の資源尾数(千尾)

	年齢	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
資源尾数 (千尾)	1歳	188,253	624,709	125,775	147,516	156,718	45,509	245,468	685,047	187,351	249,357
	2歳	39,868	102,686	194,367	12,939	457,514	34,312	48,992	100,159	174,183	172,810
	3歳	86,784	61,903	56,966	27,720	32,615	186,315	14,986	35,879	9,253	47,918
	4歳	8,962	10,700	10,271	1,743	0	25,377	13,106	0	0	3,688
	計	323,867	799,997	387,379	189,918	646,847	291,513	322,552	821,086	370,788	473,773

## 4月1日\*\*時点の資源量(トン)

	年齢	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
資源量* (トン)	1歳	6,187	20,531	4,134	4,848	5,150	1,496	8,067	22,514	6,157	8,195
	2歳	2,233	5,752	10,887	725	25,626	1,922	2,744	5,610	9,756	9,679
	3歳	6,502	4,638	4,268	2,077	2,444	13,959	1,123	2,688	693	3,590
	4歳	788	941	903	153	0	2,232	1,152	0	0	324
	計	15,710	31,861	20,191	7,803	33,220	19,608	13,087	30,812	16,607	21,789

\*各年齢の平均体重は、7月1日時点の値、1歳33 g、2歳56 g、3歳75 g、4歳以上88 gと仮定した。

\*\*春漁が最盛期であり、4月1日にパルス的に漁獲すると仮定した。

表 2-1. (続き)

調査時点(6月1日)の現存尾数(千尾)

	年齢	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
現存尾数 (千尾)	1歳	430,428	183,626	58,660	140,309	173,110	115,970	302,802	84,922	5,671	137,270	66,158
	2歳	158,451	619,937	113,139	130,209	87,164	72,642	121,363	230,041	205,224	2,543	166,705
	3歳	17,756	15,837	113,492	17,629	10,939	13,461	30,262	70,790	54,343	2,890	22,521
	4歳	0	466	0	31,009	2,328	0	2,184	9,753	1,408	1,930	312
	計	606,634	819,866	285,291	319,157	273,542	202,073	456,611	395,506	266,646	144,634	255,696

調査時点(6月1日)の現存量(トン)

	年齢	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
現存量* (トン)	1歳	14,146	6,035	1,928	4,611	5,689	3,811	9,951	2,791	186	4,511	2,174
	2歳	8,875	34,723	6,337	7,293	4,882	4,069	6,798	12,885	11,495	142	9,337
	3歳	1,330	1,187	8,503	1,321	820	1,009	2,267	5,304	4,072	217	1,687
	4歳	0	41	0	2,727	205	0	192	858	124	170	27
	計	24,351	41,986	16,768	15,952	11,596	8,889	19,208	21,837	15,877	5,040	13,226

1月1日時点の資源尾数(千尾)

	年齢	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025
資源尾数 (千尾)	1歳	578,237	247,533	85,450	204,534	243,620	166,706	416,695	116,895	7,943	171,800	82,934	11,621
	2歳	226,489	844,972	170,002	200,942	130,076	123,501	177,496	323,372	290,361	3,341	210,595	49,052
	3歳	25,380	21,586	170,533	27,206	16,325	22,885	44,258	99,510	76,887	3,796	28,450	124,559
	4歳	0	635	0	47,855	3,474	0	3,195	13,710	1,991	2,535	394	16,827
	計	830,105	1,114,726	425,985	480,537	393,496	313,092	641,643	553,486	377,182	181,472	322,373	202,060

資源量(1月1日時点)

	年齢	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025
資源量* (トン)	1歳	19,003	8,135	2,808	6,722	8,006	5,479	13,694	3,842	261	5,646	2,726	382
	2歳	12,686	47,328	9,522	11,255	7,286	6,917	9,942	18,112	16,263	187	11,796	2,747
	3歳	1,902	1,617	12,777	2,038	1,223	1,715	3,316	7,456	5,761	284	2,132	9,332
	4歳	0	56	0	4,208	306	0	281	1,206	175	223	35	1,480
	計	33,591	57,136	25,107	24,223	16,821	14,111	27,233	30,615	22,460	6,341	16,687	13,941

4月1日\*\*時点の資源尾数(千尾)

	年齢	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025
資源尾数 (千尾)	1歳	510,292	218,447	75,409	180,501	214,994	147,118	367,732	103,159	7,010	151,613	73,189	10,256
	2歳	199,876	745,685	150,027	177,331	114,792	108,990	156,639	285,374	256,243	2,948	185,849	43,288
	3歳	22,397	19,049	150,495	24,009	14,407	20,196	39,057	87,817	67,852	3,350	25,107	109,923
	4歳	0	560	0	42,232	3,066	0	2,819	12,099	1,757	2,237	348	14,850
	計	732,565	983,742	375,931	424,073	347,259	276,303	566,248	488,449	332,862	160,148	284,493	178,317

4月1日\*\*時点の資源量(トン)

	年齢	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025
資源量* (トン)	1歳	16,770	7,179	2,478	5,932	7,066	4,835	12,085	3,390	230	4,983	2,405	337
	2歳	11,195	41,767	8,403	9,933	6,430	6,105	8,774	15,984	14,352	165	10,410	2,425
	3歳	1,678	1,427	11,276	1,799	1,079	1,513	2,926	6,580	5,084	251	1,881	8,236
	4歳	0	49	0	3,714	270	0	248	1,064	155	197	31	1,306
	計	29,644	50,422	22,157	21,377	14,844	12,453	24,033	27,018	19,821	5,596	14,727	12,303

\*各年齢の平均体重は、7月1日時点の値、1歳33g、2歳56g、3歳75g、4歳以上88gと仮定した。

\*\*春漁が最盛期であり、4月1日にパルス的に漁獲すると仮定した。

表 2-2. 資源計算に用いた漁獲量および 1～5 月の漁獲尾数

各年1～2月および3～5月の漁獲量(トン)(速報値)

月		2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
漁獲量	1～2月	1,100	1,912	1,949	955	1,733	735	700	610	1,210	801
(トン)	3～5月	3,907	5,224	3,952	1,179	6,055	1,955	2,612	1,823	3,828	2,058

各年の年計の漁獲量(トン)の速報値と農林統計値

		2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
漁獲量	速報値	5,365	8,144	6,930	3,349	8,764	3,632	4,086	3,205	5,807	3,485
(トン)	農林値	5,873	8,782	7,466	3,706	9,217	4,046	4,372	3,484	5,980	3,735

1～2月の年齢別漁獲尾数(千尾)\*

年齢		2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
漁獲尾数	1歳	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
(千尾)	2歳	4,604	17,328	23,590	4,182	28,251	1,392	6,833	7,362	20,161	10,179
	3歳	10,022	10,446	6,914	8,960	2,014	7,560	2,090	2,637	1,071	2,822
	4歳	1,035	1,806	1,247	564	0	1,030	1,828	0	0	217

3～5月の年齢別漁獲尾数(千尾)\*

年齢		2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
漁獲尾数	1歳	50,672	109,576	27,503	25,707	30,283	4,731	52,028	41,415	46,896	24,534
(千尾)	2歳	9,384	14,708	36,895	1,463	82,472	3,410	8,810	5,572	38,115	15,914
	3歳	20,428	8,866	10,813	3,133	5,879	18,515	2,695	1,996	2,025	4,413
	4歳	2,109	1,533	1,950	197	0	2,522	2,357	0	0	340

\*月別漁獲量(府県調べの速報値)とトロール調査結果の年齢別重量組成に基づき計算した(補足資料2)。

表 2-2. (続き)

各年1～2月および3～5月の漁獲量(トン) (速報値)

	月	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
漁獲量 (トン)	1～2月	713	437	553	787	408	1,083	649	452	182	27	87
	3～5月	2,210	3,968	3,064	2,929	1,654	1,486	2,254	2,569	2,178	82	236

各年の年計の漁獲量(トン)の速報値と農林統計値

		2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
漁獲量 (トン)	速報値	3,506	5,081	4,444	4,240	2,636	3,039	3,416	3,148	2,425	242	366
	農林値	3,614	5,307	4,601	4,330	2,860	3,194	3,635	3,245	2,453	250	388

1～2月の年齢別漁獲尾数(千尾)\*

	年齢	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
漁獲尾数 (千尾)	1歳	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2歳	11,063	7,534	4,216	9,038	6,016	15,491	8,512	5,456	2,380	128	1,312
	3歳	1,240	192	4,229	1,224	755	2,870	2,122	1,679	630	145	177
	4歳	0	6	0	2,152	161	0	153	231	16	97	2

3～5月の年齢別漁獲尾数(千尾)\*

	年齢	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
漁獲尾数 (千尾)	1歳	39,064	17,355	10,720	25,760	24,694	19,385	35,528	9,989	778	2,221	1,179
	2歳	14,380	58,592	20,676	23,905	12,434	12,142	14,240	27,059	28,150	41	2,972
	3歳	1,611	1,497	20,741	3,237	1,561	2,250	3,551	8,327	7,454	47	401
	4歳	0	44	0	5,693	332	0	256	1,147	193	31	6

\*月別漁獲量(府県調べの速報値)とトロール調査結果の年齢別重量組成に基づき計算した(補足資料2)。

表 3. トロール調査に基づく資源計算の結果

## 漁獲割合とF値

	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
漁獲量(トン) <sup>*1</sup>	5,365	8,144	6,930	3,349	8,764	3,632	4,086	3,205	5,807	3,485
資源量(4月1日時点) <sup>*2</sup>	15,710	31,861	20,191	7,803	33,220	19,608	13,087	30,812	16,607	21,789
漁獲割合	34.1	25.6	34.3	42.9	26.4	18.5	31.2	10.4	35.0	16.0
F値 <sup>*3</sup>	0.42	0.30	0.42	0.56	0.31	0.20	0.37	0.11	0.43	0.17

\*1 府県調べの速報値に基づく値

\*2 漁獲割合やF値の算出に用いた4月1日時点の値。

\*3 各年齢のFは等しいと仮定した。

年齢別親魚量(トン)<sup>\*4</sup>

年齢	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
1歳	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
親魚量										
2歳	1,011	2,943	4,914	284	12,966	1,076	1,297	3,455	4,361	5,589
3歳	2,943	2,373	1,927	815	1,236	7,817	531	1,655	310	2,073
4歳	357	481	408	60	0	1,250	545	0	0	187
計	4,310	5,797	7,248	1,159	14,203	10,143	2,373	5,110	4,671	7,849

\*4 各年齢の成熟率は、1歳0.0、2歳1.0、3歳1.0、4歳以上1.0と仮定した(補足資料2)。

## 翌年加入(1歳)尾数と前年親魚量(トン)および再生産成功率RPS

	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
翌年加入量 (百万尾)	708	143	167	178	52	278	776	212	283	578
前年親魚量 (トン)		4,310	5,797	7,248	1,159	14,203	10,143	2,373	5,110	4,671
RPS <sup>*5</sup> (尾/kg)		33.1	28.8	24.5	44.5	19.6	76.5	89.5	55.3	123.8

\*5 RPSの2005年以降の中央値(RPSmed)は、28.8 (尾/kg)。

## 各年の年齢別漁獲尾数(千尾)

年齢	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
1歳	64,288	159,691	43,171	63,306	41,343	8,430	76,635	71,257	65,512	39,878
漁獲尾数										
(千尾)										
2歳	13,615	26,249	66,714	5,553	120,695	6,356	15,295	10,418	60,907	27,636
3歳	29,637	15,824	19,553	11,896	8,604	34,514	4,679	3,732	3,236	7,663
4歳	3,060	2,735	3,525	748	0	4,701	4,092	0	0	590

## 各年の年齢別漁獲量(トン)

年齢	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
1歳	2,113	5,248	1,419	2,081	1,359	277	2,519	2,342	2,153	1,311
漁獲量 <sup>*6</sup>										
(トン)										
2歳	763	1,470	3,737	311	6,760	356	857	584	3,412	1,548
3歳	2,220	1,186	1,465	891	645	2,586	351	280	242	574
4歳	269	241	310	66	0	413	360	0	0	52
計	5,365	8,144	6,930	3,349	8,764	3,632	4,086	3,205	5,807	3,485

\*6 各年齢の平均体重は、7月1日時点の値、1歳33 g、2歳56 g、3歳75 g、4歳以上88 gと仮定した。

表 3. (続き)

漁獲割合とF値												
	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025
漁獲量(トン) <sup>*1</sup>	3,506	5,081	4,444	4,240	2,636	3,039	3,416	3,148	2,425	242	366	793
資源量(4月1日時点) <sup>*2</sup>	29,644	50,422	22,157	21,377	14,844	12,453	24,033	27,018	19,821	5,596	14,727	12,303
漁獲割合	11.8	10.1	20.1	19.8	17.8	24.4	14.2	11.6	12.2	4.3	2.5	6.4
F値 <sup>*3</sup>	0.13	0.11	0.22	0.22	0.20	0.28	0.15	0.12	0.13	0.04	0.03	0.07

\*1 府県調べの速報値に基づく値

\*2 漁獲割合やF値の算出に用いた4月1日時点の値。

\*3 各年齢のFは等しいと仮定した。

年齢別親魚量(トン) <sup>*4</sup>													
	年齢	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025
親魚量	1歳	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	2歳	6,784	25,813	4,617	5,473	3,634	3,172	5,173	9,706	8,657	109	6,977	1,559
	3歳	1,017	882	6,195	991	610	786	1,725	3,995	3,067	165	1,261	5,296
	4歳	0	30	0	2,046	152	0	146	646	93	129	21	840
計	7,801	26,726	10,812	8,510	4,397	3,958	7,045	14,347	11,817	403	8,258	7,694	

\*4 各年齢の成熟率は、1歳0.0、2歳1.0、3歳1.0、4歳以上1.0と仮定した(補足資料2)。

翌年加入(1歳)尾数と前年親魚量(トン)および再生産成功率RPS												
	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025
翌年加入量 (百万尾)	248	85	205	244	167	417	117	8	172	83	12	238
前年親魚量 (トン)	7,849	7,801	26,726	10,812	8,510	4,397	3,958	7,045	14,347	11,817	403	8,258
RPS <sup>*5</sup> (尾/kg)	31.5	11.0	7.7	22.5	19.6	94.8	29.5	1.1	12.0	7.0	28.8	28.8

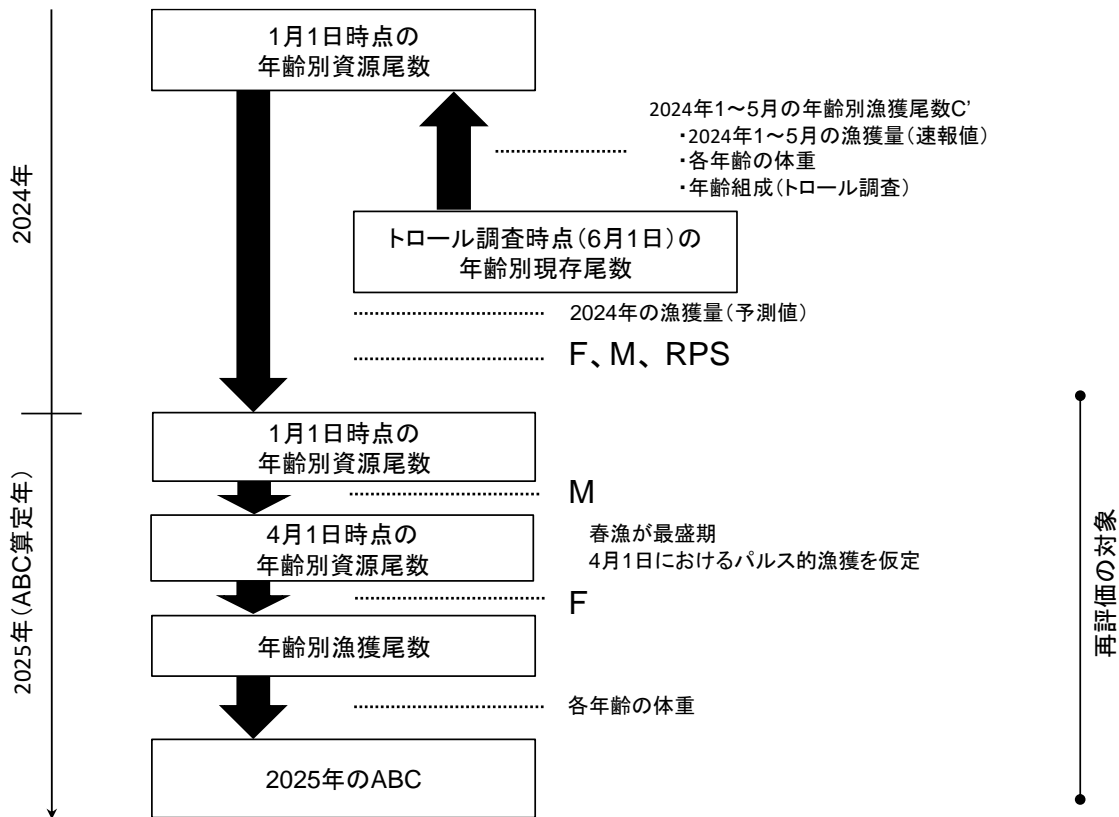
\*5 RPSの2005年以降の中央値(RPSmed)は、28.8 (尾/kg)。

各年の年齢別漁獲尾数(千尾)													
	年齢	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025
漁獲尾数 (千尾)	1歳	60,361	22,014	15,124	35,801	38,175	35,907	52,263	12,018	858	6,560	1,818	661
	2歳	23,643	75,146	30,089	35,172	20,383	26,601	22,262	33,245	31,349	128	4,617	2,790
	3歳	2,649	1,920	30,183	4,762	2,558	4,929	5,551	10,230	8,301	145	624	7,085
	4歳	0	56	0	8,376	544	0	401	1,409	215	97	9	957

各年の年齢別漁獲量(トン)													
	年齢	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025
漁獲量 <sup>*6</sup> (トン)	1歳	1,984	723	497	1,177	1,255	1,180	1,718	395	28	216	60	22
	2歳	1,324	4,209	1,685	1,970	1,142	1,490	1,247	1,862	1,756	7	259	156
	3歳	198	144	2,261	357	192	369	416	766	622	11	47	531
	4歳	0	5	0	737	48	0	35	124	19	9	1	84
計	3,506	5,081	4,444	4,240	2,636	3,039	3,416	3,148	2,425	242	366	793	

\*6 各年齢の平均体重は、7月1日時点の値、1歳33 g、2歳56 g、3歳75 g、4歳以上88 gと仮定した。

補足資料 1 資源評価の流れ



※ABC は漁業法改正前の考え方に基づく基本規則を適用した値

## 補足資料 2 資源計算の方法

## 1. 資源量の算出方法

2024 (t) 年 1 月 1 日における a 歳の資源尾数 ( $N_{a,t}$ ) を次式により求めた。

$$N_{a,t} = N'_{a,t} \exp\left(\frac{5}{12}M\right) + C'_{a,t} \exp\left(\frac{5}{12}M\right) \quad (1)$$

上式において、 $N'_{a,t}$  は t 年の調査時点 (6 月 1 日) における 1~4 (a) 歳の現存尾数 (補足資料 3)、 $C'_{a,t}$  は t 年 a 歳の 1~5 月における漁獲尾数であり、1~5 月の漁獲量を、1 歳が漁獲加入していない 1~2 月と漁獲加入後の 3~5 月に分け、それぞれ調査時点の年齢別重量組成により案分し、各年齢の平均体重で除して求めた。自然死亡係数 M は、寿命を 5 歳とし、田内・田中の式で求めた ( $M=0.5$ )。そして、a 歳の t 年 1 月 1 日における資源量 ( $B_{a,t}$ ) は次式により求めた。

$$B_{a,t} = N_{a,t} w_a \quad (2)$$

上式では、 $w_a$  は a 歳の平均体重であり、それぞれ 1 歳 33 g、2 歳 56 g、3 歳 75 g、4 歳以上 88 g とした。次に、t 年 4 月 1 日における資源尾数 ( $N''_{a,t}$ ) を次式により求めた。

$$N''_{a,t} = N_{a,t} \exp\left(-\frac{3}{12}M\right) \quad (3)$$

そして、a 歳の t 年 4 月 1 日における資源量 ( $B''_{a,t}$ ) を次式により求めた。

$$B''_{a,t} = N''_{a,t} w_a \quad (4)$$

上式では、 $w_a$  は a 歳の平均体重であり、(2) 式と同じ値とした。そして、春漁が最盛期であることから 4 月 1 日にパルスの漁獲すると仮定し、a 歳の 4 月 1 日における資源量 ( $B''_{a,t}$ ) と t 年の漁獲量 ( $Y_t$ ) より、漁獲割合 ( $E_t$ ) と漁獲死亡係数 ( $F_t$ ) を次式よりそれぞれ求めた。

$$E_t = \frac{Y_t}{\sum_{a=1}^4 B''_{a,t}} \quad (5)$$

$$F_t = -\ln(1 - E_t) \quad (6)$$

また、F は各年齢とも等しい (選択率 (1.0)) と仮定した。

\*計算に用いた漁獲量は、各府県調べによる速報値であり、大和堆における漁獲は除いた。

(t+1) 年の 2~4 歳+の資源尾数 ( $N_a$ ) を次式により求めた。

$$N_{a+1,t+1} = N_{a,t} \exp(-M - F_t) \quad (7)$$

(t+1) 年の 1 歳の資源尾数 (加入尾数) は、次式より求めた。



$$N_{1,t+1} = RPS_{med} S_{t-1} \quad (8)$$

上式では、 $RPS_{med}$  は 2005～2023 年の再生産成功率 (RPS) の中央値 28.8 (尾/kg) である。 $S_{t-1}$  は、(t-1) 年の産卵親魚量であり、12 月 31 日に産卵すると仮定し、以下の式で求めた。

$$S_{t-1} = \sum_{a=1}^4 N_{a,t-1} \exp(-F_{t-1} - M) w_a m_a \quad (9)$$

上式では、 $w_a$  は a 歳の平均体重であり、(2) 式と同じ値とした。また、 $m_a$  は a 歳の成熟率を表し、それぞれ 1 歳 0.0、2 歳 1.0、3 歳 1.0、4 歳 1.0 とした。

## 2. 漁獲量の算出方法

(t+1) 年の漁獲量を次のように求めた。まず、(6) ～ (10) 式による (t+1) 年の各年齢 (a 歳) の資源尾数  $N_{a,t}$  と F を用い、次式より各年齢 (a 歳) の漁獲尾数  $C_{a,t+1}$  を求めた。

$$C_{a,t+1} = N_{a,t+1} \exp\left(-\frac{3}{12}M\right) [1 - \exp(-F)] \quad (10)$$

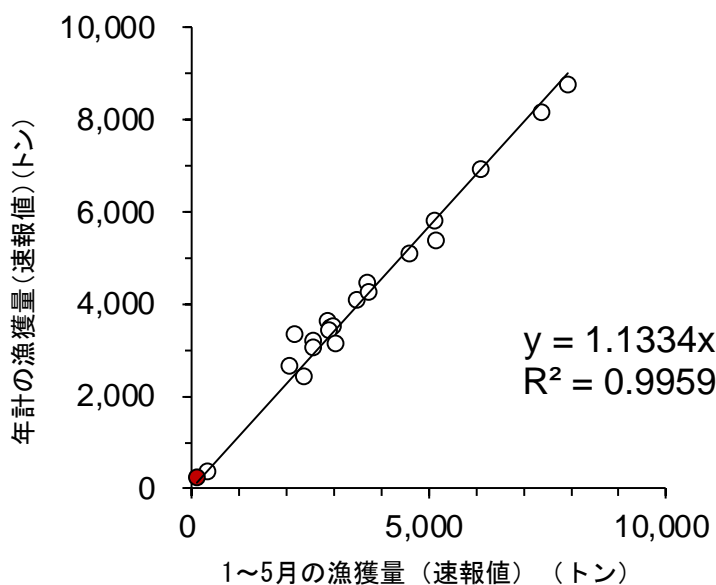
次に、漁獲量 (Y) を次式で求めた。

$$Y = \sum C_{a,t+1} w_a \quad (11)$$

上式では、 $w_a$  は a 歳の平均体重 (7 月 1 日) であり、(2) 式と同じ値とした。

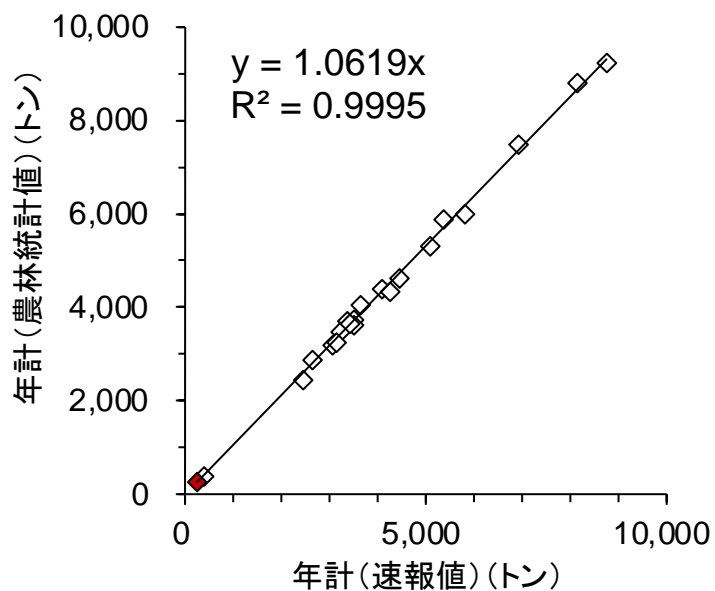
次に、F 値に関する条件を記す。なお、漁獲量の速報値の 1～5 月と年計には相関関係 (補足図 2-1) があり、2024 年の漁獲量  $Y_{2024}$  を 1～5 月の速報値に基づき予測し、 $F_{2024}$  を算出した。 $F_{current}$  は、当年を含む直近 3 年 (2022～2024 年) の平均値とした。

以上で算出した漁獲量の数値に、さらに漁獲量の速報値と農林統計値の関係 (補足図 2-2) (大和堆における漁獲量および速報値の誤差) を考慮し、農林統計値へ換算した。



補足図 2-1. 府県調べの漁獲量速報値 1~5 月と年計の関係

年計は暦年であり、大和堆を除いた値である。赤丸は最新年の値である。



補足図 2-2. 漁獲量 (年計) に関する速報値と農林統計値の関係

漁獲量の速報値は各府県調べの月別漁法別漁獲量で、一部は主要港のみの値である。農林統計値は漁業・養殖業生産統計年報 (水産庁) の数値で、府県別年計の水揚げ量で大和堆の漁獲量も含む。赤丸は最新年の値である。

### 補足資料3 面積密度法による現存量の推定方法

ハタハタ日本海西部系群の現存量の推定は、調査船による着底トロール調査（補足資料4、5）の結果を用いた面積密度法により行っている。2004～2024年の5～6月に、日本海西部の水深190～550mにおいて但州丸（358トン）（兵庫県立香住高等学校所属）による着底トロール調査を実施した。本海域を沖底小海区に沿った9海区（能登、加賀、若狭、但馬、隠岐周辺、隠岐北方、西浜田、東浜田、浜田沖）と190～300m、300～400m、400～550mの3水深帯（西浜田、東浜田は2水深帯、浜田沖は1水深帯）に区分した計23層に層化し、約140の調査点を配置した。使用したトロール網は、コッドエンドの目合は20mm、曳網時の袖先間隔が約17mである。各曳網で、袖先間隔を漁網監視装置により計測した。曳網速度を3ノット、曳網時間を原則30分とした。網着底から曳網終了までを曳網距離とし計測した。そして、調査結果に基づき面積密度法により調査時点（6月1日）の現存量および現存尾数を推定した。

海区と水深帯で層化した層(i)ごとに各調査点(j)における曳網距離に袖先間隔を乗じてi層j地点の曳網面積( $a_{i,j}$ )を求めた。i層j地点の採集重量あるいは採集尾数( $C_{i,j}$ )を $a_{i,j}$ で除し、i層j地点の密度( $d_{i,j}$ )を算出し、その平均をi層における密度 $d_i$ とした。なお、 $n_i$ はi層の調査地点数を表す。

$$d_{i,j} = \frac{C_{i,j}}{a_{i,j}} \quad (1)$$

$$d_i = \frac{1}{n_i} \sum_{j=1}^{n_i} d_{i,j} \quad (2)$$

次に、i層の平均密度( $d_i$ )にi層の海域面積( $A_i$ )を乗じ、i層の現存量あるいは現存尾数( $B_i$ )を求め、これらを合計することにより日本海西部における現存量あるいは現存尾数( $B$ )とした。

$$B_i = A_i \cdot d_i \quad (3)$$

$$B = \sum B_i \quad (4)$$

トロール網の採集効率は東北太平洋のイトヒキダラ（成松ほか2013）やズワイガニ（渡部・北川2004）のものとほぼ同値の0.3とした。さらに、i層の密度の標準偏差( $SD_i$ )を求め、 $n_i$ と $A_i$ によりi層における現存量あるいは現存尾数の標準誤差( $SE_i$ )を計算し、調査海域全体における資源の標準誤差( $SE$ )および変動係数( $CV$ )を下式により求めた。なお、ここで得られる $CV$ とは現存尾数および現存量の指標値に対する値であり、採集効率に伴う推定誤差は含んでいない。

$$SE_i = \frac{A_i \cdot SD_i}{\sqrt{n_i}} \quad (5)$$

$$SE = \sqrt{\sum SE_i^2} \quad (6)$$

$$CV = \frac{SE}{B} \quad (7)$$

また、t 年の体長階級 1 (体長 5 mm 間隔) の調査時点 (6 月 1 日) における現存尾数 ( $N'_{t,l}$ ) は以下のように表される。

$$N'_{t,l} = \sum_{a=1}^A N'_{t,a} p_{t,a,l} \quad (8)$$

上式で a は年齢、 $p_{t,a,l}$  は t 年の a 歳の現存尾数 ( $N'_{t,a}$ ) のうち体長階級 1 に属する割合である。 $p_{t,a,l}$  は以下の正規分布に従うと仮定した。

$$p_{t,a,l} = \frac{1}{\sqrt{2\pi\sigma_{t,a}^2}} \exp\left(-\frac{(l-\mu_{t,a})^2}{2\sigma_{t,a}^2}\right) \quad (9)$$

上式で l は体長階級 1 の階級値、 $\mu_{t,a}$  は t 年の a 歳の平均体長、 $\sigma_{t,a}$  は t 年の a 歳の体長の標準偏差である。 $p_{t,a,l}$  は下式の条件に従うと仮定した。

$$\sum_{l=0}^L p_{t,a,l} = 1 \quad (10)$$

$\mu_{t,a}$  は年齢群 (x) ごとにベルタランフィ어의成長式に従い、 $\sigma_{t,a}$  は  $\mu_{t,a}$  と線形関係にあると仮定した。

$$\mu_{x,a} = L_{\infty x} (1 - \exp(-K_x (a - a_{0x}))) \quad (11)$$

$$\sigma_{t,a} = \alpha \mu_{t,a} + \beta \quad (12)$$

以上の条件のとき、 $N'_{t,a}$ 、 $L_{\infty x}$ 、 $K_x$ 、 $a_{0x}$ 、 $\alpha$ 、 $\beta$  を推定パラメータとし、MS-excel のソルバーを用いて下式の尤度関数 (L) を最大化する各パラメータを求めた。

$$L = \prod_{l=0}^L \frac{1}{\sqrt{2\pi\sigma^2}} \exp\left(-\frac{(N'_{t,l} - N_{t,l}^{ob})^2}{2\sigma^2}\right) \quad (13)$$

$$\sigma^2 = \frac{1}{L} \sum_{l=0}^L (N'_{t,l} - N_{t,l}^{ob})^2 \quad (14)$$

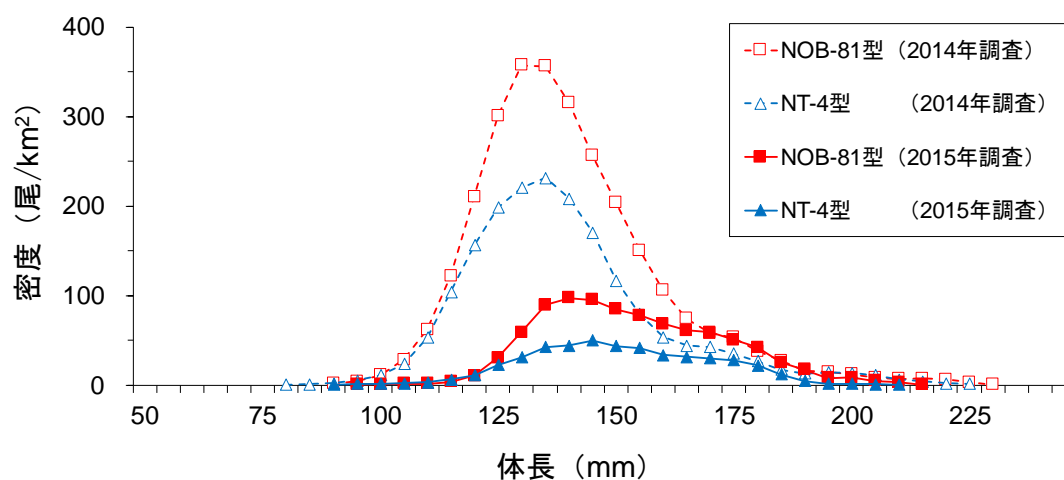
上式で、 $N_{t,l}^{ob}$  は体長階級 1 の採集尾数と (1) ~ (4) 式により推定された t 年の体長階級 1 の現存尾数の観測値である。

#### 引用文献

- 成松庸二・伊藤正木・服部 努・稲川 亮 (2013) 平成 24 年度イトヒキダラ太平洋系群の資源評価. 平成 24 年度我が国周辺水域の漁業資源評価, 水産庁・水産総合研究センター, 833-843.
- 渡部俊広・北川大二 (2004) 曳航式深海用ビデオカメラを用いたズワイガニ類に対する調査用トロール網の採集効率の推定. 日水誌, **70**, 297-303.

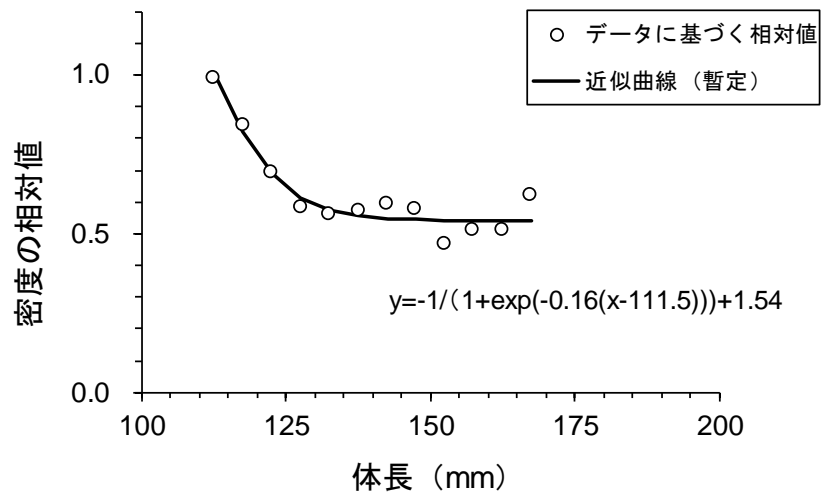
#### 補足資料4 トロール調査の新旧網の採集尾数の比較

2014年9月と2015年9月に、但州丸（旧船499トン、新船358トン）（兵庫県立香住高等学校所属）による着底トロール網の新旧網比較調査を隠岐周辺海域の水深200～500m帯において実施した。旧網としてNT-4型（ニチモウ社製）を、新網としてNOB-81型（ニチモウ社製）を用いた。曳網は、2014年調査では新旧網それぞれ14回ずつ、2015年調査では15回ずつ行った。曳網速度は3.0ノット、曳網時間は原則30分とした。また、曳網時の袖先間隔を漁網監視装置（スキャンマー社製）で計測した。採集されたハタハタは雌雄別に尾数および重量を測定するとともに体長を測定した。そして、ハタハタ（雌雄込み）の体長階級別平均密度（尾/km<sup>2</sup>）を、新網を用いた場合と旧網を用いた場合それぞれについて算出した。その結果を調査年別に補足図4-1に示す。また、新網に対する旧網の相対値（旧/新）について、平均採集数が2尾以上であった体長階級の実測値（2年分）およびそれらを用いて最小二乗法により求めた近似曲線を補足図4-2に示す。推定した体長階級別相対値（110mm以下は115mm階級の推定値と、170mm以上は165mm階級の推定値と等しいと仮定した。）により、新網を用いてトロール調査を実施した2015年と2016年の調査結果を、旧網を用いた場合の値に換算した。



補足図4-1. 新旧網それぞれに基づくハタハタの体長階級別平均密度

各体長階級の値はその前後の階級を含む計3階級（15mm）分の平均値であり、採集効率を1.0と仮定したものである。

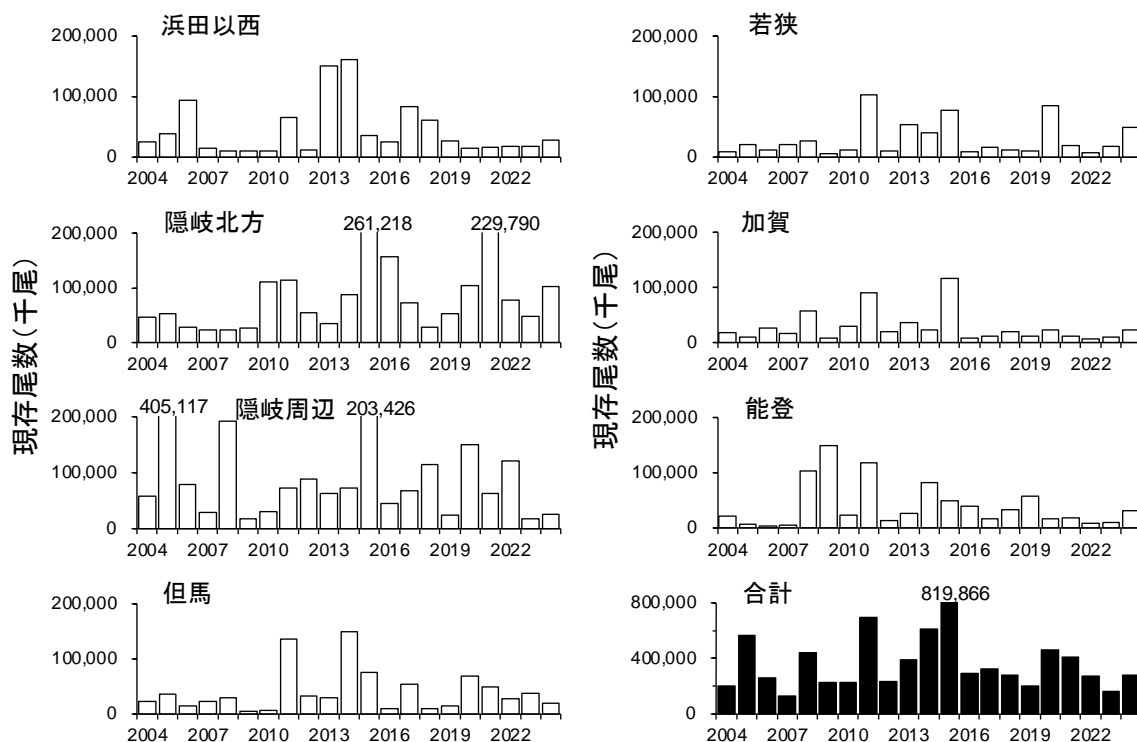


補足図 4-2. 新旧網の体長階級別密度の相対値 (旧網/新網)

補足資料 5 調査船調査の経過及び結果

トロール調査の結果に基づく海域別現存尾数を補足図 5-1 に示す。2004 年以降の海域組成は、基本的には隠岐周辺および隠岐北方が多い傾向はあるが、日本海西部の両端に位置する浜田以西と能登・加賀の資源尾数の増減により大きく変化している。この変化は、本資源が対象海域外から来遊する 2 群、すなわち、秋田県由来と朝鮮東岸由来、それぞれの日本海西部への来遊状況や各年における構成年級の豊度を反映していると考えられる。

例えば、2008、2009 年に能登で多かったのは、卓越していた 2006 年級が秋田県由来であったことを示している。2015、2016 年の隠岐北方での増加や 2017 年の但馬以西での増加は 2013 年級によると考えられるが、加賀や能登では 2015 年は増加したが 2016 年と 2017 年は減少している。2006 年級と 2013 年級の分布特性および由来産卵場が異なっていたと推察される。そして、2024 年の現存尾数は、前年に比べて但馬沖を除く全ての海域で、特に隠岐北方において増加した（表 2-1）。



補足図 5-1. 海域別現存尾数 (調査時点 (6月1日))



## 補足資料 6 沖底漁獲成績報告書を用いた資源量指標値の算出方法

沖底漁獲成績報告書では、月別漁区（10 分柁目）別の漁獲量と網数が集計されている。これらより、月  $i$  漁区  $j$  における CPUE ( $U$ ) は次式で表される。

$$U_{i,j} = \frac{C_{i,j}}{X_{i,j}}$$

上式で  $C$  は漁獲量を、 $X$  は努力量（網数）をそれぞれ示す。

集計単位（月または小海区）における資源量指数 ( $P$ ) は CPUE の合計として、次式で表される。

$$P = \sum_{i=1}^I \sum_{j=1}^J U_{i,j}$$

集計単位における有効漁獲努力量 ( $X'$ ) と漁獲量 ( $C$ )、資源量指数 ( $P$ ) の関係は次式のように表される。

$$P = \frac{CJ}{X'} \quad \text{すなわち} \quad X' = \frac{CJ}{P}$$

上式で  $J$  は有漁漁区数であり、資源量指数 ( $P$ ) を有漁漁区数 ( $J$ ) で除したものが資源密度指数 ( $D$ ) である。

$$D = \frac{P}{J} = \frac{C}{X'}$$

本系群では、努力量には、月別漁区別における有漁漁区または有漁網における値を合計したものを用いている。資源が極めて少ない場合（分布域なのに対象種の漁獲のない操業がある場合）、有漁漁区数や有漁網数を用いると、CPUE が過大推定される可能性がある等の問題がある。しかし、沖底の対象種では、10 分柁目の漁区内に均一に分布していないことがほとんどであり、ある魚種に対する狙い操業下では、同漁区内に分布する他の魚種に対し全く努力が掛からないことが起こり得る。この場合、操業された漁区の全努力量を用いると、魚種毎の CPUE は過小になる。沖底が複数の魚種を対象にしていることから、有漁漁区数や有漁網数を用いたほうが、対象種に掛かる努力量として妥当であると考えられる。

## 補足資料 7 2023 年漁獲量の低迷の要因に関する考察と 2024 年以降の漁獲量について

ハタハタ日本海西部系群の 2023 年漁獲量は記録上最も低い 250 トンであり、この値は昨年時点で記録上最も漁獲量が少なかった 2022 年の約 1/10 であった (図 6)。この漁獲量の低迷は日本海西部系群だけでなく、同一の繁殖集団と想定される韓国でも同様の傾向であった (図 4)。日本海西部系群において漁獲量の主体となる漁法である沖合底びき網の CPUE から、2022 年と 2023 年における主漁場の CPUE を比較した (補足図 7-1 および 7-2)。漁獲量が例年並みであった 2022 年の漁獲量をみると、漁獲量の大半を占める鳥取県および兵庫県の操業において、隠岐周辺、浜田沖および迎日南部での漁業が集中しており、特に鳥取県において CPUE が高かった (補足図 7-1 a)。一方 2023 年では同様の範囲で漁業は行われているものの 2022 年と比べて CPUE は極めて低かった (補足図 7-1 b)。なお 2023 年の漁獲努力量は 8 万と直近 3 年間で最も高い値だった (図 7)。次に月別府県別の漁獲量推移を見てみると、2022 年は上半期である 4~5 月が漁獲の最盛期であったが、2023 年は上半期の漁獲がほぼなく、下半期にやや漁獲があったにとどまった (補足図 7-2)。

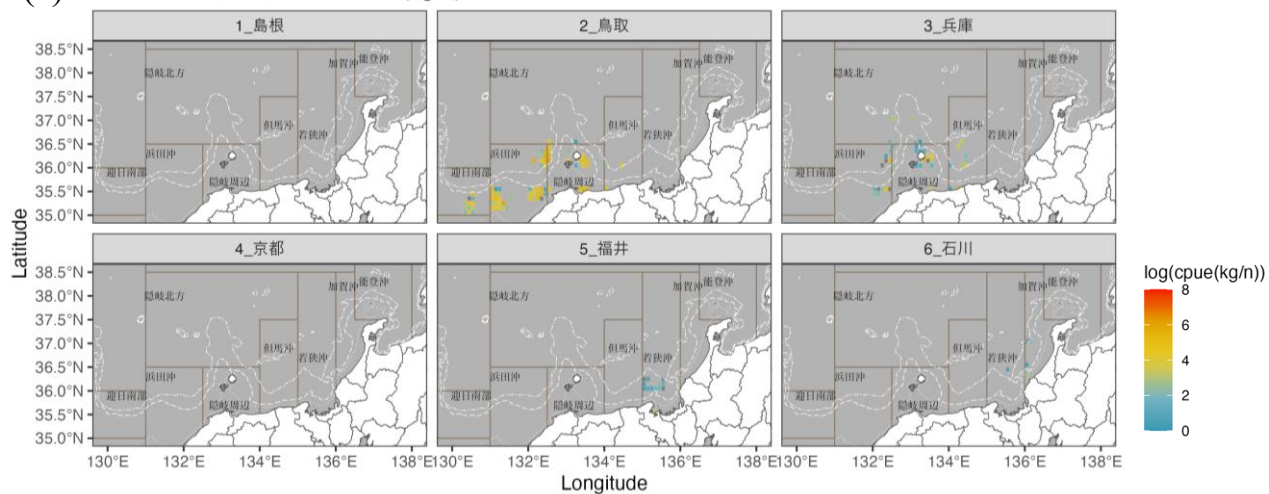
水産機構による調査船調査の体長頻度分布 (図 10) では、2022 年において概ね 125 mm をピークとする 1 歳魚がほぼ観測されず、翌年の 2023 年では 150 mm を中心とする 2 歳魚がほぼ確認されなかった。鳥取県の漁獲物精密測定結果 (図 9) から、漁獲サイズは 110~190 mm の範囲であり、これらの体サイズは 2 歳魚を主体とした齢級に該当する。これらのことから、2023 年の漁獲量の低迷は 2023 年に漁獲の主体となる 2 歳魚 (2021 年級群) が極めて少なかったためと想定される。2021 年級加入を左右する親魚は 2019 年級以降の年級であると考えられるが、調査船調査の体長頻度分布 (図 10) ではそれらの年級は年によって資源尾数の多寡はあるものの 2 歳以上の個体がある程度の量で存在しており、産卵親魚量自体は例年並みであったと考えられる。

2021 年級群の資源量の些少の要因として、2020 年下半期から 2021 年上半期における産卵場の環境要因がハタハタの孵化、初期生残および成長に負の影響を与えたと考えられている。令和 5 年度日本海ブロック資源評価担当者会議において、飯田ら (2024) より、ハタハタ日本海西部系群の資源量は産卵場である朝鮮半島沿岸の 1~3 月水温が高いほど減少すると示唆された。また同会議における太田・藤原 (2024) より、2020 年下半期における朝鮮半島東岸の水温は高い傾向にあり、例年よりも産卵場が縮小した可能性が高いこと、次に同範囲において 2021 年 1 月下旬に非常に強い寒気が流入し、2021 年級群が孵化や初期生残に影響するほど低い水温 (5℃以下) に曝されたことを示唆した。このことから 2021 年級群の資源量は水温の複合的な要因により激減したと考えられる。

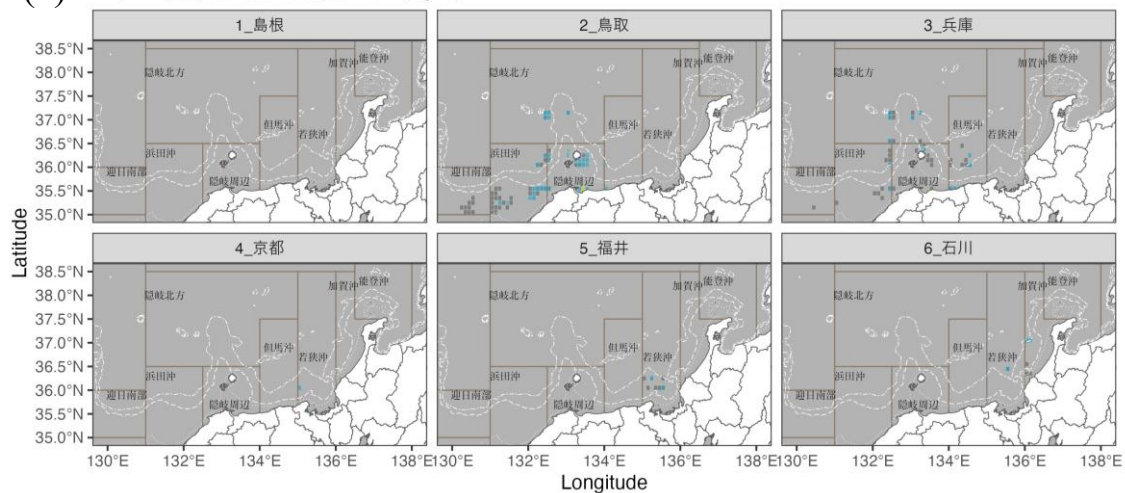
これらの影響と低迷が 2021 年以降も継続していたかを検討するため、2020~2024 年の上半期の府県別漁獲量を補足図 7-3 に示す。漁獲量の主体となる鳥取・兵庫県で見ると (補足図 7-3 a)、2022 年までは 4~5 月で漁獲量が多くなるものの、2023 年は非常に少なかった。2024 年漁獲量は 2023 年よりも多いものの、2022 年以前と比べて累積漁獲量は 1/3~1/6 にとどまった。一方、鳥取・兵庫県を除く府県で見ると (補足図 7-3 b)、2024 年の上半期累積漁獲量は 2022 年以前よりも低いものの、月別にみると京都府、福井県および石川県は 2022 年以前と同等の水準になる場合があった。これらから、2024 年漁獲量は全体としては 2022 年以前通りではないものの回復傾向にあるが、漁獲量の主体となる鳥取・兵

庫県では十分に回復したとは言えない状態にある。これらの傾向を詳細に議論するため、水産機構が実施する調査船調査による小海区別生息密度をみると（補足図 7-4 a）、2023 年を除き生息密度は隠岐周辺および隠岐北方が高かった。より詳細な生息密度の地理的分布を見てみると（補足図 7-4 b）、但馬沖以西では全体的に密度が高く、特に隠岐周辺と北方の境界線付近で突出して生息密度が高い地点が散見された。また、直近 5 年では見られない傾向として、2024 年は若狭沖以東においても全体的に生息密度が高い傾向にあった。これらの生息密度を、沖底主漁場（隠岐周辺、浜田沖、迎日南部）とそれ以外のエリアで平均して比較すると（補足図 7-5）、2022 年以前は概ね沖底主漁場で CPUE が高かったが、2024 年はその他のエリアが高くなった。これらのことから、2024 年漁獲量は全体を通して回復傾向にあるものの、漁獲量の主体となる鳥取・兵庫県の漁獲量は 2023 年と比べて微増にとどまったと考えられた。また、2022 年のように調査船調査で 1 歳魚がほとんど観測されないといった事例は 2023 年および 2024 年では確認されていないため（図 10）、2021 年に朝鮮半島沿岸生じたと想定される特異的な水温環境のようなイベントが生じない場合において、今後資源は緩やかに回復していくと考えられる。今後は調査船調査での体長組成などのモニタリングを継続すると共に、産卵場の水温環境などに注視することで、評価年以降の漁獲量の予測や資源の評価を円滑に進められると思われる。

(a) ハタハタ\_2022\_1-5月\_CPUE(kg/n)

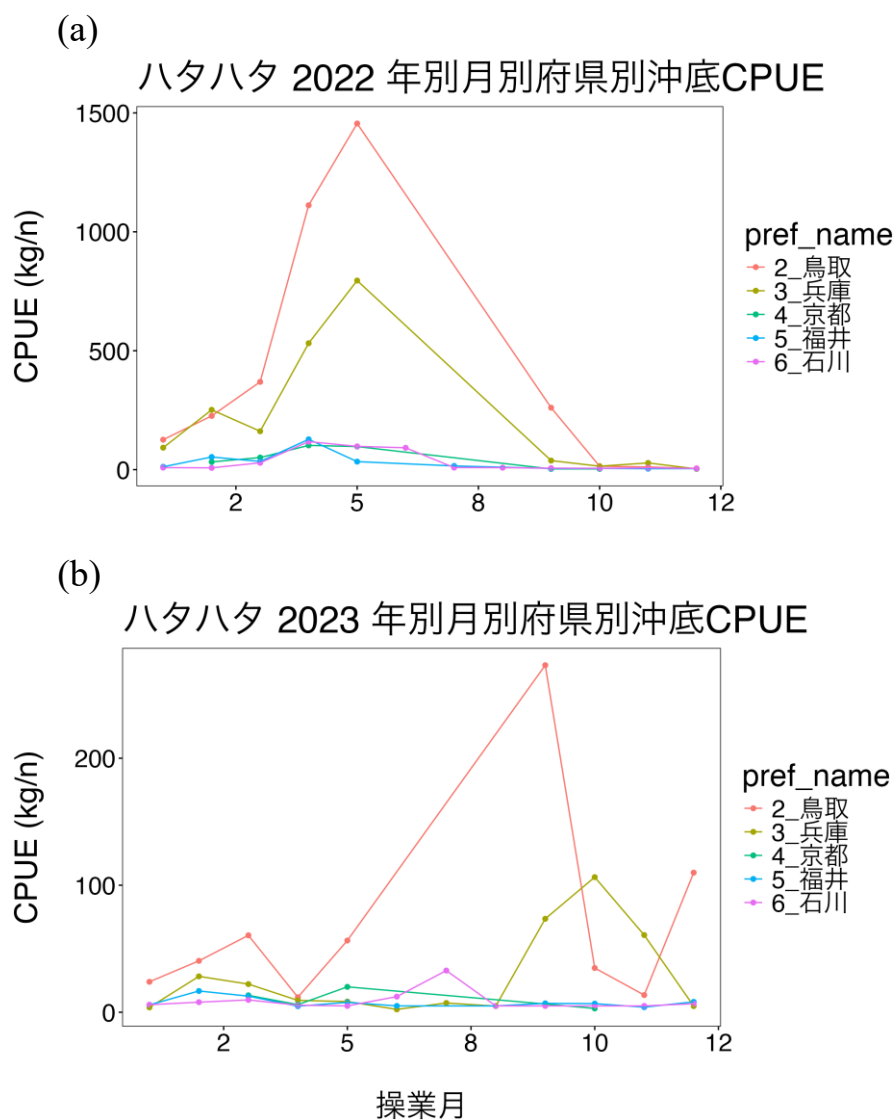


(b) ハタハタ\_2023\_1-5月\_CPUE(kg/n)



補足図 7-1. 2022 年および 2023 年の 1～5 月における府県別沖底 CPUE の地理的分布

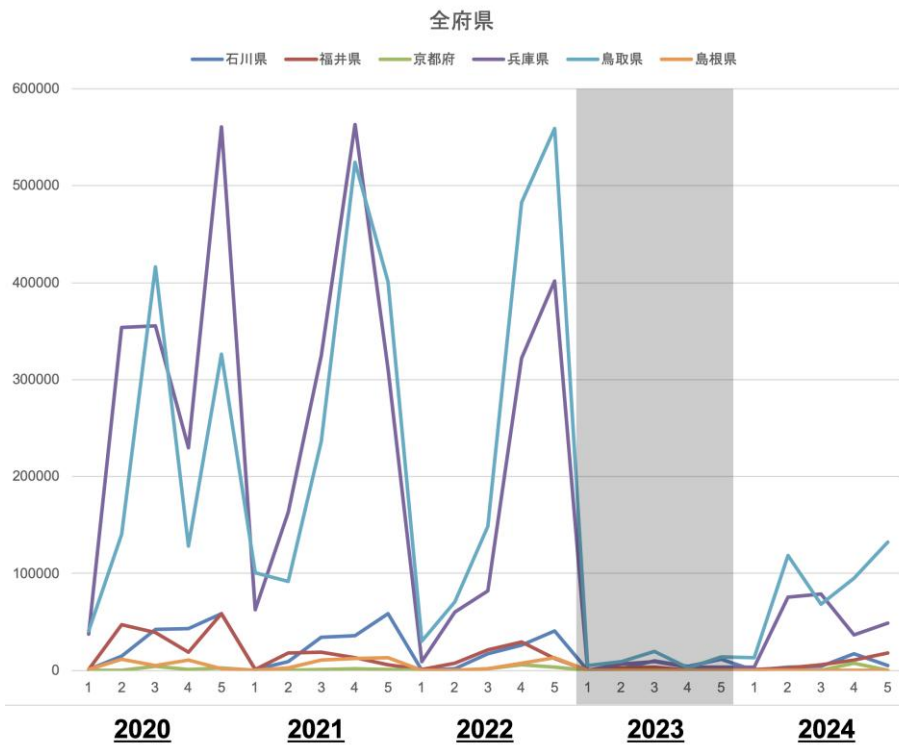
各セルは 1～5 月の CPUE の平均値を、色の濃淡が CPUE の多寡を表しており、濃い灰色はほぼ漁獲のなかった漁区を示す。(a) は 2022 年、(b) は 2023 年の CPUE を示す。



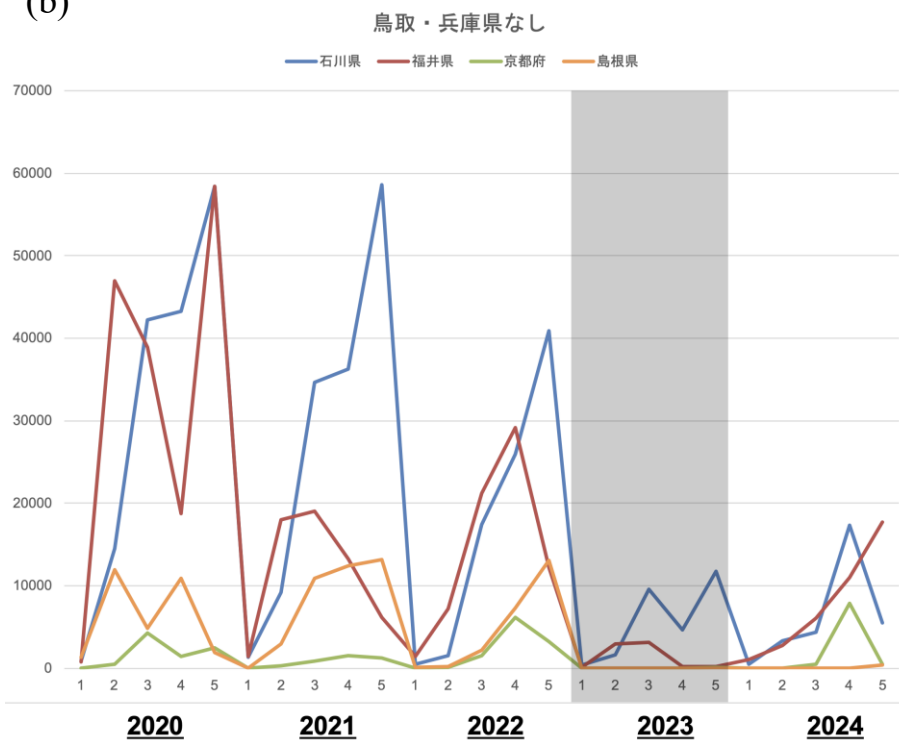
補足図 7-2. 2022 年および 2023 年における府県別沖底 CPUE の月別集計

各色が府県の CPUE を表しており、(a) は 2022 年、(b) は 2023 年を示す。なお、禁漁期の指定のある海域のデータは含まない。

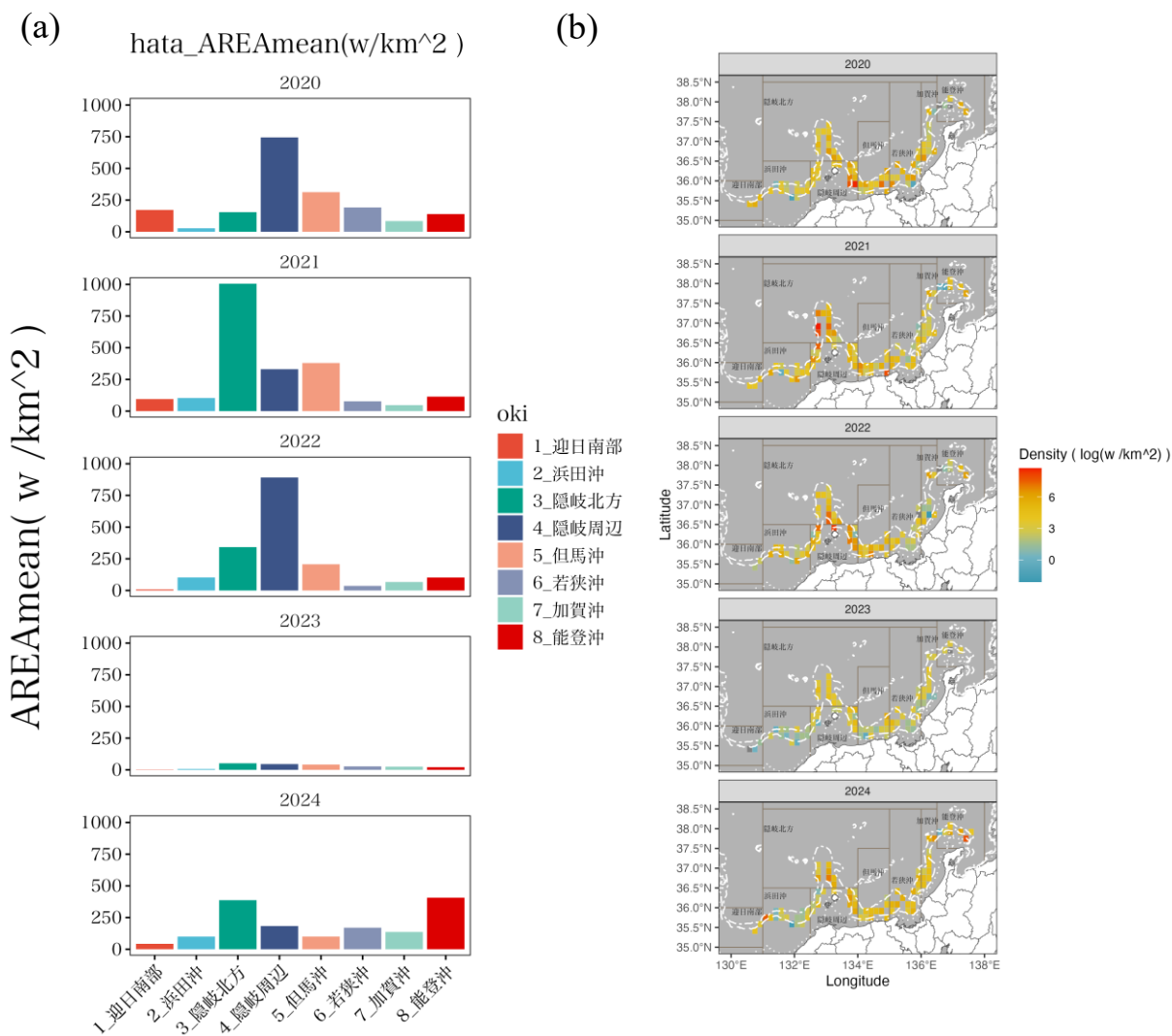
(a)



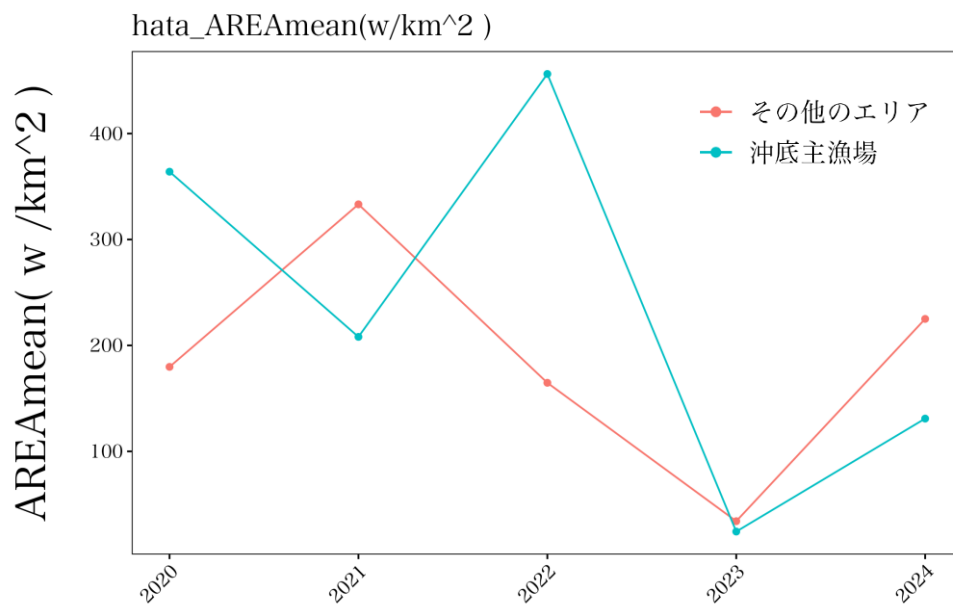
(b)



補足図 7-3. 府県別漁期上半期の漁獲量 (2020~2024)



補足図 7-4. 調査船調査による小海区別生息密度 (重量) とその地理的分布 (2020~2024)  
 (a) は小海区別に平均された生息密度、(b) は漁区ごとの生息密度を示す。



補足図 7-5. 主漁場とそれ以外のエリアでの生息密度の比較

主漁場は沖底小海区における隠岐周辺、浜田沖、迎日南部での調査船調査データの生息密度の平均、その他のエリアは主漁場に含まなかった小海区全ての平均を示す。2021年のようにその他のエリアの方が高い場合があるが、これは隠岐北方での生息密度が高かった場合に生じる（補足図 7-4 (b) 2021 年を参照）。